713
125
713-125
1200501585341
O
複写

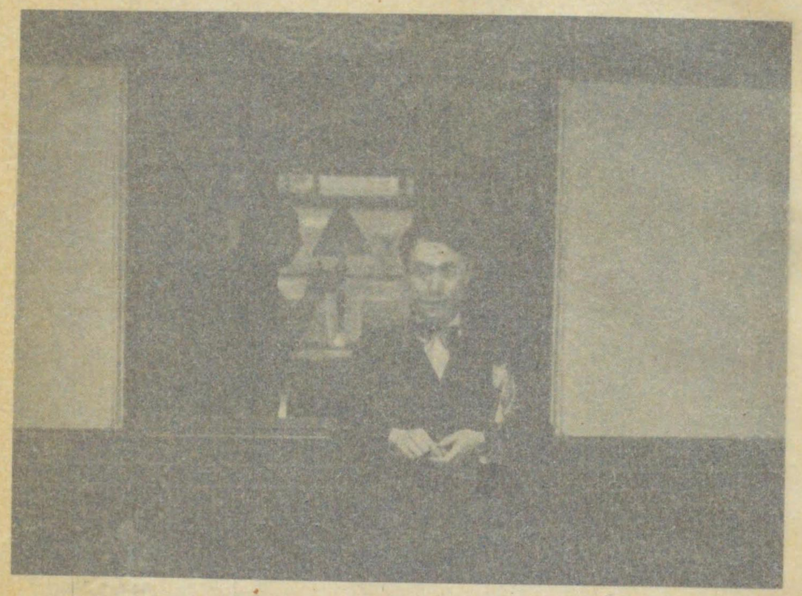
納本

渡佛日記

虛子著

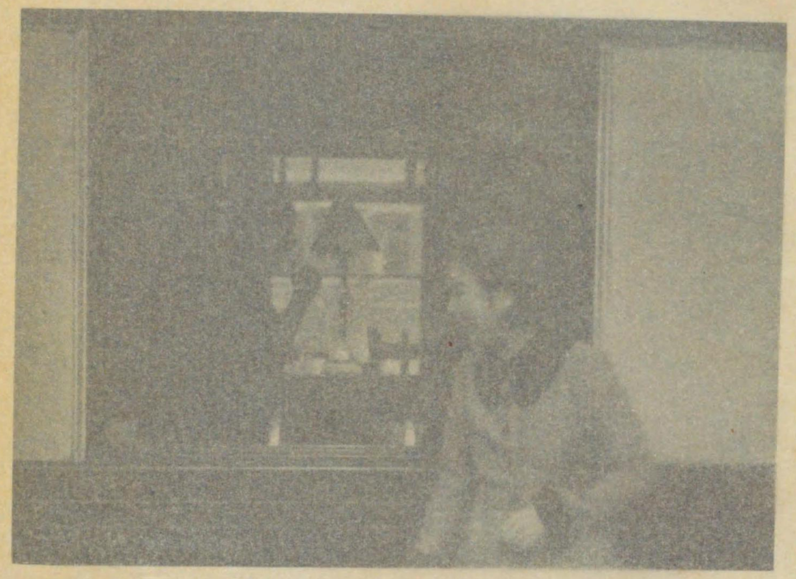
改造社版

昭和二年・納本・北五



倫敦を發つ車内にて見送人と對談せる婦子
車外にあるは友次郎

倫敦を發つ車内にて見送人と對談せる虚子
車外にあるは友次郎



倫敦なる業内にて見送人と對談せる盧子
意外にあるは章子

倫敦を發つ車内にて見送人と對談せる虚子

車外にあるは章子

713-125

目次

序 一

渡佛日記

日本を離る 三

上海 三

香港ドライヴウエー　二三
南支那海　二六
新嘉坡、ジョホールを訪ふ　三三
彼南の稲田　四三
魔の海ベンガル灣　六〇
コロンボの夕燒　六八
印度洋航行、ソマリランドの一角を見る　七三
亞典上陸、アラブあはれ　八四
紅海に入る　九三
カイロ行、ピラミッドに登る　一〇三
地中海、コルシカを望む　一〇九
マルセーユ上陸　一二八
巴里滯在　一三六
巴里俳句會　一四七
ムードン吟行　一五八
日本人會の俳句會　一六二
ベルギー、アントワープ行　一七一
ラインに沿うてハイデルベルヒを訪ふ　一八四
伯林オペラ見物　一九五
日本學會に於ける俳句講演　二一一
ポツダム行並に俳句會　二二五
和蘭通過、倫敦に著く　二三三
ストラツトフオード・オン・アボンに遊ぶ　二三二
キユー・ガーデン吟行　二四二
二五五

國立美術館を見る　二六一
P・E・N・クラブにて講演　二七一
ヴオーカンス氏招宴　二九
はいかい詩人小集　二六七
馬耳塞出帆　二〇七
スエズ運河通過　二三五
紅海　二三三
モンスーン　二三五
新嘉坡　二三四
香港、臺灣　二四四
支那芝居を見る　二四七
日本に歸る　二五四

渡佛雜記

行つて來よう　二五五
旅だより　二六七
梓園の記　二七一
黄浦江　二七五
旅だより　二七八
小さい國旗　二七九
久千代　二八三

プラチナ・ブロンドの夫人　三九一
南十字星　三九五
四迷の碑　三九九
熱帶季題小論　四〇三
乞食が無い　四〇六
寄木細工のやうな小鳥　四〇九
スピカですか　四一二
東洋と西洋（ヴュイルモルヅ氏の標題を借りて）　四一五
もう大概歐羅巴も判つた　四一〇
マテーズ氏　四一三
巴里句會　四一九
ドーム寺院の鐘の音　四二三

ハイデルベルヒ　四二七
ビユルガ姉妹　四四〇
巴里マゼスチツク旅館より　四四四

洋行雜記

和服　四四七
海上生活　四五一
緣　四五四
行人旁午　四五七

英國　四六〇
花鳥諷詠を說く　四六三
海外に於ける俳句熱　四六六

俳話

何故日本人は俳句を作るか（伯林日本學會に於ける講演）　四七三
倫敦P・E・N・クラブにて（一九三六・五・五）　四八五
"ON HAIKU"（右英譯）　四九〇
留別俳話（二月十三日、東京中央放送局にて）　四九四

歐洲俳句の旅（六月二十二日、東京中央放送局にて）　五〇三

一章子

旅だより　五一三
父娘俳句行脚　五二七
玄海灘　五二七
上海　五二八
香港　五二九
彼南の蛇寺　五三〇

マラツカ海峽　五三二
ムードン吟行　五三三
歐羅巴の流行・人情・學生など　五三四
港
上海　五三六
シンガポール　五三六
コロンボ　五三七
アデン　五三七
スエズ　五三八
マルセーユ　五三九
ビユルガさん姉妹　五四〇

序

人生の旅も、もう六十三年の永い月日を重ねて來たのであるが、その殘り少なになつたうちの百二十日間をふと思ひ立つて、今度、巴里行に費し、その中八十日を船の上で暮したと云ふ事は、私の生涯にとつては一つの記錄であつた。

太平洋、瀨戸内海、玄海灘、臺灣海峽、南支那海、ボルネオ海、マラツカ海、印度洋、アラビア海、紅海、地中海等を往復して、陸地はもとより、島も見えず、船にも行き逢はず、唯水と空との間を航行する時も、私の心は別に淋しいとも思はなかつた。往路は百通、歸路は其よりも多い無電を受取り、また私からもそれに應じて返電を打つことも多かつたので、絶えず故國の人の

音信に接して居り、寧ろ匆忙の感がないでもなかつた。

また、船中の生活は、單調と云へば單調であつたが、元來私の平常の生活が極まり切つた行動を取つて居るので、それが更に限局された生活になつたところで、大して苦痛も感じなかつた。

少々船は搖れもしたが、然し怒濤が天に冲すると云ふやうな恐ろしい目には逢はなかつた。寧ろ或時などは、疊の上に居るやうな、油の上を辷るやうな輕快さを味ふことも出來、また少々船が動搖してもその動搖を感じない位に船に慣れもした。

退屈な時には、社交室で船客のさして居る將棋を見たり、また甲板の籐椅子に腰をかけて、岩波文庫などを繙いて、そのまゝ眠つてしまふ事もあつた。また船側の手摺につかまつて、いつまでも〳〵ぼんやりと波上を眺めて居ることもあつた。が、大概毎日の數時間は、自分の勤めとして居る事をこつ〳〵やる事の方に寧ろ興味があつた。

水夫等の高いマストの上で作業し、火夫等の暑き船底に働く等、其々自分達の職務に忠實である事を見るのが愉快であつた。さうして、それ等の人々の、故國日本を戀ふる心持の熾烈であつて、日本が近づくに從つて、彼等の行動が一層敏活を加ふる事を見てほゝゑまれた。

私は船の上に在る事を忘れて居る間がだん〳〵と多くなつて來た。ふと其事に氣が附いてよく

よく考へて見ると、自分は今船に乘つて居るのではあるが、然し船に乘つて居ると云ふ事よりも人生の旅を續けつゝあると云ふ感じの方が強かつた。故國に歸つて、横濱に第一歩を印したときも、それは故國に歸つたと云ふ事よりも、矢張り人生の旅を續けて、今こゝに横濱埠頭に立つたと云ふ感じの方が強かつた。

昭和十一年七月六日

ホトトギス發行所にて

虚　子

渡佛日記

日本を離る

昭和十一年二月十六日。

好天氣。自動車二臺に荷物と私、章子、糸子、吉人、立子、夢香、井手、搭乘、藤澤戸塚間の松並木の間をドライヴして横濱著。水上警察に行く。旅券捺印直ぐ濟み箱根丸に乘込む。

見送人は早や澤山見えて居り、尙續々見え、箱根丸の社交室一杯になる。水竹居氏の音頭で乾盃、寫眞を各新聞社を始め見送人の諸氏が撮る。

花の鉢が澤山船室にある。その他土產物も澤山ある。

午後三時出帆。棧橋に佇んでゐる見送人が、テープを取りハンカチを振る。活動寫眞を撮り居る人二三人を見受ける。

古　綿　子　著　の　み　著　の　ま　丶　鹿　島　立

見送人の影が見えなくなつてから船室に入る。

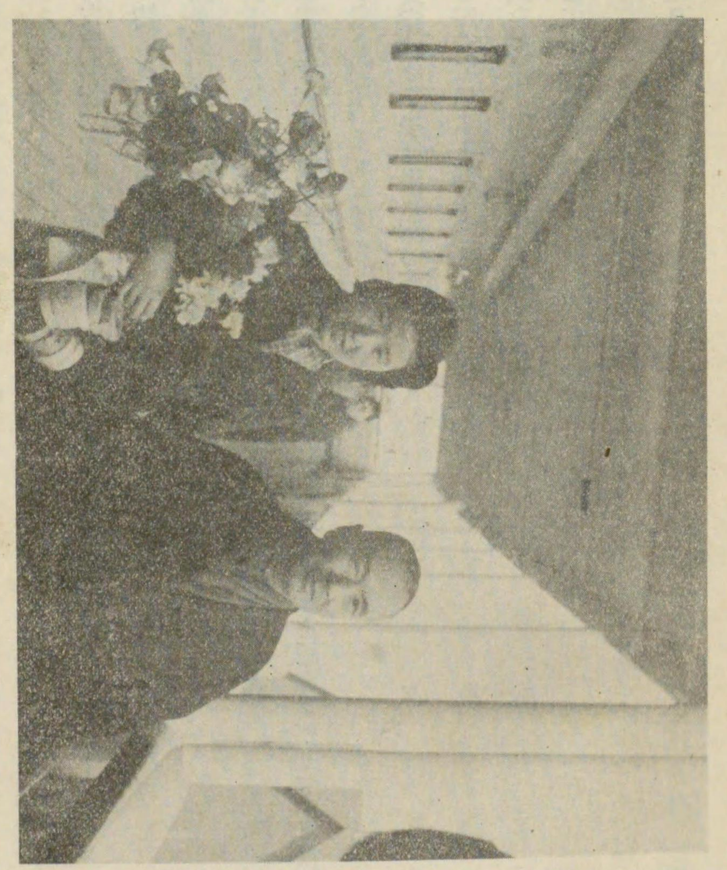
章子荷物を片付け始める。上ノ畑楠窓君（箱根丸機關長）來談。

事務長岡崎氏挨拶に來る。船長栗田氏に挨拶に行く。

夜、食堂に入る。章子少し食して氣分勝れず船室に退き床に入る。雜詠を少し見て十時就寢。

二月十七日。

朝目覺めた時、船が止つて居るやうに靜かだ。起きて見ると燈の點いた浮標が左右にある水路を徐々と進んで居る。また寢る。其中寢室の外に人聲聞え、夜も白んで來たらしい。章子も起き



鹿島立の日、船室にて——章子

た様子に、時計は何時かと問ふ。七時前と答へた。ボーイが來たので、浴槽の事を命じた。直ぐ入浴。

八時、名古屋港著。朝日新聞記者早くも來り甲板で寫眞を撮る。

章子と一緒に食堂に入る。

牡丹會員多數、續いて簑助等來訪。十二時過ぎ一同歸る。

午飯に食堂に入る。章子も大分食慾が出たらしい。雨が降り出した。

章子讀書室で手紙を認める。私も友次郎、上野義雄氏に手紙を認めシベリア便で出す。

三時船が動き出す。

晩食。食堂には章子は出なかつた。

食堂から歸つて見ると章子熟睡。

雜詠原稿を見る。章子は尙よく眠つて居る。

窓を閉めて十時就寢。

二月十八日。

六時過ぎ　起きて子供室より外面を覗いて見ると、二十四五日頃の有明の月が、大空に懸つて居る。好天氣らしい。左舷に陸地の見えるのは淡路島であらう。波穩か。

熊野灘は少し波があつたが、章子は知らずによく眠つた。

船室の吾子よく眠る寒牡丹

熊野灘少し荒れたり梅を思ふ

この船に伴ひて行く春の月

風呂、朝食は今後一々書かないことにする。

十時、大阪築港住友棧橋に繫留。逸早く朝日新聞社員來訪。談。その自動車に便乘して朝日新聞社に至る。上野社長、辰井專務、木村編輯局次長、多賀學藝部長と會談。藤井旅館に行き、旭川、木國、鍋平朝臣と牛鍋をつゝく。

大阪毎日新聞社を訪ひ奥村專務、平川總務、大竹學藝部長と會談。船に歸る。

留守に泊月、竹桃、ふみ子來て居る。三時、解纜神戸に向ふ。三人も一緒。

雜詠を少し見、泊月と談話。

五時、神戸著。多數の電報や手紙を受取る。

大勢の出迎を受ける。

としを夫婦、中子、汀子と一緒にとしをの家に行く。歸りに元町で買物。途中で章子鎌倉へ電話をかける。としをに送られて歸船。十時過ぎ寢。

二月十九日。

としを來船。共に三ノ宮まで行き、章子と二人は大阪に行く。

直ちに、東野田の藤田邸に行き、未亡人に面談、親しく耕雪氏の悔みを述べ、それから大毎に行く。

大毎で電送寫眞、寫眞版等の工場を見て居る中に、横光利一君が來て、共につるやに行き大毎の招宴に列した。高石主幹、奥村專務、平川總務、大竹學藝部長、和氣律次郎、渡邊鈞、高原慶三、田村木國、外に折節來阪中の佐藤肋骨君も亦席にあつた。

西ノ宮野村泊月居に行く。鍋平朝臣が既に在つた。としをに用事があつて章子に電話をかけさせた所、晴子お產、女子出生、母子健全とのことを聞く。揮毫半折六十枚。耿陽、圭草、木國が來た。神戸花隈、吟松亭、關西同人句會に列席。佐藤肋骨、佐藤紅綠、水鳴、楠窓も加つた。兩

佐藤君より洋行につき注意談があつて、歡談數刻、寄せ書なども試みた。

夜、章子鎌倉へ電話をかける。晴子安產のこと、並びにたけし病氣（チブス）大變宜しいとのこと。

としをに送られて、十一時前船に歸つた。

春潮の日々の機嫌や今日はよし
騷立てる春の潮に船乘りす
我心春潮にありいざ行かむ
櫻餅の皿廻り來ぬ廻しけり
九人目の孫も女や玉椿

章子も句を作る。

生れたる姪を思ふや櫻餅　章子

二月二十日。

としをが來る。章子の買物があるので一緒に連れて出る。

暫時雜詠を見て居たが、見送人續々見える。としを夫妻と三人の孫と、下の食堂にて紅茶を啜る。

三時出帆。雜詠を選むことに沒頭。章子楠窓君の部屋にて楠窓君と共に雜詠を選り分け呉れる。十時半寢。

二月二十一日。

八時過ぎ門司著。朝日新聞社員來る。日原方舟君を始め此地の俳人諸君、松山より酒井默禪、波多野晋平、福岡より河野靜雲、其他諸君續々見える。

一時過ぎ方舟君先導の下に、ランチにて門司に行き大毎及び郵船に至り敬意を表し、續いて下ノ關に渡り、乘合バスに乘り、バスガールの說明を聞きながら長府に行き、功山寺に行き七卿幽閉の居間などを見た。一樹の老梅の三四分がた花を附けてゐるのが殊に感じがよかつた。傍の尊攘堂も見た。維新の志士、乃木大將の遺墨等が澤山あつた。それから乃木神社に詣り、乃木將軍の舊居を訪うた。

再び門司に渡つて、三宜樓の後藤萍子市長の招宴に列した。佐藤郵船支店長、石垣大阪商船支

店長　釜瀨助役、楠窓、螢雪、方舟同席。

梅其他五句を作ることにした。佐藤君に丁子、釜瀨君に三田と云ふ號を與へた。

河豚の皿が出た。私が躊躇して居る中に、方舟君などが勸めるまゝに、章子河豚を二箸ほど食うた。

十時半船に歸つた。

この日、生れた高木の兒の命名に左の三つの名前を送つて其一つを選ませることにした。

旅子　たびこ
防子　さきこ
亭子　たかこ

壇ノ浦を過ぎ　滿開の梅の寺
老木の梅咲きそめし寺に來し
僧我を咎め顏なり梅の寺
梅を見て明日玄海の船にあり
風師山梅ありと云ふ登らばや

章子の句。

咲きそめし美しき梅功山寺　章子

二月二十二日。

九時、萍子、螢雪、門司中學校長立花花城、しづの女等船に來る。

十時前ランチに乘り、門司に向つた。直ちに用意がしてある自動車にて風師山に登つた。昭和八年、萍子市長の拓いたドライヴウエーは其頂上近くまで達して居つた。其展望は八方に展けて居る。眼の下には箱根丸等の繫つて居る關門の水が横つて居り、瀨戸内海の方面は、周防灘を隔てて國東半島の端にある姫島を望み、また豊後富士の稱ある由布の優麗なる姿が其右に聳えて居るのがはつきりと見える。轉じて日本海の方面から眼を左に移すと、帆柱山の裾の八幡市、小倉市、戸畑市、若松市等の工業地帶の煤煙が遠く冬雲に繫がつて居る。香港のドライヴウエーに似て、景色はそれよりも勝れて居るとの楠窓君の咄であつた。萍子君先導の下に朝日支局に敬意を表した。

十一時半船に歸る。熊本の宮崎草餅君、小倉白菊會の女流俳人の面々其他多數の見送りを受け

た。十二時出帆。

機關長室にて、白菊會員齎すところの赤飯其他を食うた。今日は私の誕生日である。

午飯を終えた頃から波が稍荒くなつて來た。暫く甲板を歩いてから部屋に歸つた。章子熟睡。

無電十數通、書簡數通を認む。

永い晝寢から覺めた章子、船が搖れて居るのに平氣になつて、晩の食堂でもいろ〳〵とメヌーを注文して居た。贈られた大鯛が食卓を賑はした。横光利一君もこの時から同じテーブルに連つた。機關長楠窓君のテーブルには、私達親娘と横光君とが列することになつたのである。

大分搖れる。章子平氣にて手紙を書く。

今日明日は玄海灘や冴えかへる

玄海の荒波ゆゝし春鷗

玄海の波荒けれど部屋は春

章子も荒波を見て歸つて左の句を示した。

玄海の大波の上に春の雨　章子

雨はまた夕方から降り出して來たのであつた。波は愈荒い。

電報（無電ともに）貰ふこと前後百通に達す。一々返電が打てぬのを殘念に思ふ。こゝに概括してお禮を申上げて置く。

其中に左の句があつたことだけを記錄して置く。

先づ聞かん幾日の後の更衣　永田　青嵐（十七日）
沖ゆくは箱根丸かや梅の丘　福本　鯨洋（十九日）
看護婦は朝の掃除や塀の薔薇　高木　晴子（二十日）
單衣著て雛祭る夜もありぬべし　矢部謙次郎（同　）
箱根丸の灯はまだ見えず春の星　武昌丸山家　海扇（同　）
寛いでケビンの春や親子連れ　上野　精一（同　）
船室の親子二人の雛祭　赤星水竹居（廿一日）
鎌倉に無事に留守もり梅椿　星野　立子（廿二日）

二月二十三日。

昨夜は船の動搖が劇しかつたので、眠りがしば〳〵覺めた。いつもの通り湯に入つたが、少し

氣分が悪くなつて横になる。今まで元氣であつた章子も、傳染したと見えて横になつて眠る。

夕刻からやゝ靜まる。海の面を見ると少し黄色く濁つて居る。揚子江の水の濁りが、此邊まで及んで居るのであるとの事である。

夕暮になつて晴れる。夕日の落ち込んで居るところの雲が赤く染まつて居る。楠窓君が其邊りを指して、あの邊が上海に當ると云ふ。夜、機關長室で楠窓君に筆記をして貰ふ。部屋に歸つて見ると、章子は女ボーイの八木さんと、荷物を運んで居るところであつた。廣い部屋が開いて居るので、そこに移るが爲である。

新しき部屋に移つて寢る。

上　海

二月二十四日。

目覺めたる頃は、既に揚子江を上つて、その支流の黄浦江に入り、吳淞砲臺が遙か向うに見えるところを船が進んで居るのである。船は先刻潮待ちの爲に暫く停船して居たのであるが、此時は徐々と進み始めたのであつた。眼の前には限りなき兩岸の平野が見渡される。

徐々と遡つて行くにつれて、スタンダード石油會社等が見えて來る。枯木が、處々にある家の間に立つて居るのも見える。鷗が飛んで居るが、その羽の色が内地で見る鷗とは違ふ。舢舨(さんぱん)を漕ぐ船頭の手つきが面白く眺められる。多くの舢舨が江上を行き交うて居る。その間を我船が徐々と進む。甲板から見て居ると、一艘の舢舨に大きな戎克が衝き當りさうになつて進んで來る。舢舨の船頭が慌てゝ方向を轉じたことによつて、僅に衝突を免れた。其時、舢舨の船頭が怒つて、棹を取り上げて戎克の船頭を打たうとしたが、屆かなかつたので、船の上にあつた小石のやうなものを取り上げて、それを續けさまに拋るのが見えた。微笑まるゝ光景であつたが、是が此地の支那人から受けた第一印象であつた。

黑の斑のある鷗とぶ江の春

食堂にあつて朝飯の終つたころ、船が既に埠頭に繫つて居るのに氣が附いた。舷側に出て見ると、一團の出迎の人々が私を見付けて挨拶をする。月廼家の宮本靖二君も其中に混つて居る。

間もなく堀場定祥、大内穆水、野口荏吾、下村非文、中田秋平、高西天瓜其他數氏が船に上つて來る。打合せは萬事楠窓君に賴んであるので、定祥君が楠窓君と機關長室で話して居る間、私は社交室で諸君に面會。此地の新聞記者にも逢ふ。

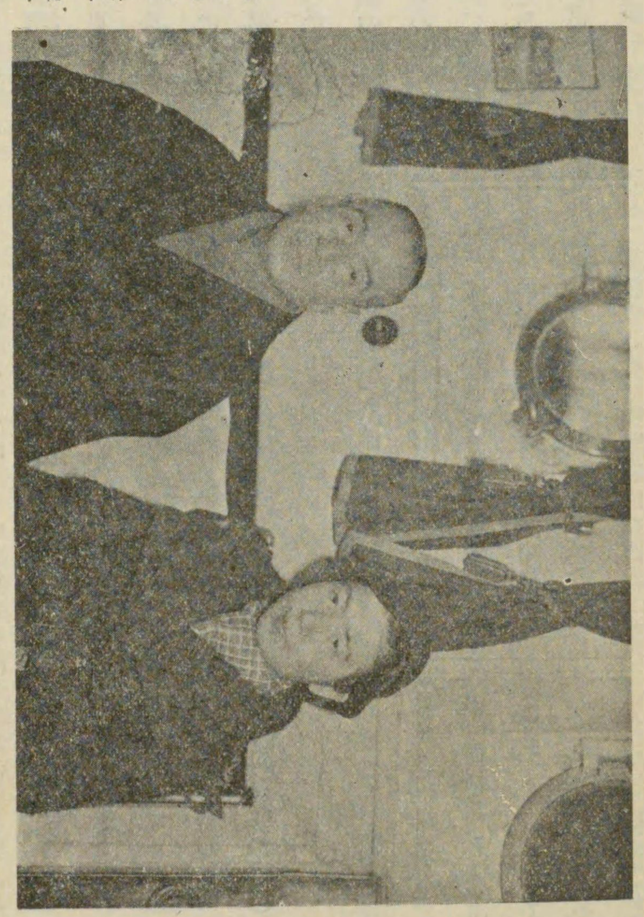
滙山碼頭(クエーサイド)と云ふこの埠頭を上つて、江に平行した楊樹浦路(ヤンジッブール)と云ふ町を通つて、先づ定祥君の勤めて居る上海紡織織布工場を一見することになり、蒸氣一杯の暑い部屋に、布を織る支那の女工の哀れなる姿を見、それから軍工路と云ふ田舍道を通つて、香苑(シャンエン)と云ふ處を見た。そこは大した處でもなかつたが、この邊りの百姓家の樣や、山羊を放し飼ひにして居る景色や、麥畑の中に土饅頭が並び柩が置かれて居るのを見た。また竹藪もあつたが、内地の竹藪よりも、竹が小さく瘦せて居るのが丁度南畫を見るやうな感じであつた。鵲も居たが、烏もまた飛んで居た。クリークと英語で云つて居る溝渠が澤山あるのであつた。南船北馬と云ふ語があるやうに、この江南にはこの溝渠が澤山あるのであつた。

やがてまた軍工路を行くと翔引路(シャインエル)と云ふ處に出て、突然原の中に丹碧の大きな建物が聳えて居るのを見たが、それは大上海市政府と扁してある上海の市役所の建物であつた。これはこの市政府を中心に、新たに大上海を建設する目的であつて、ゆく〳〵は租界の繁榮を奪はふと云ふ遠大

の計畫であるとのことであつた。支那人の巡査が澤山に其邊をうろついて居て、なか〳〵其中に入ることは許さなかつた。

天樂寺と云ふ禪寺に行つて見た。寺に入る門前の麥畑の傍に、蠶豆の葉が生えて居るのが目についた。唯內地の蠶豆の葉よりも硬さうで、一寸落花生の葉に似て居た。犬ふぐりに似た小さい花も咲いて居た。天樂寺と云ふのは、粗末な建物であつて、殊に頽廢して居り、禪宗ではあるが南無阿彌陀佛と云ふ貼紙がしてあつて、宗旨は曖昧なものらしかつた。祖先の冥福を祈る爲に、錢の形をした紙を燃やすことをする習はしださうで、丁度、其紙を燃やして居る處に出會はしたが、其燃やすものゝ臺になつて居るものには、他所の寺の名前が彫つてあつて、他所の寺のものを持つて來て間に合はして居るらしかつた。總てが此類で、佛像などもお粗末なものであつて、粗末な本尊の裏の方には殊に粗末な佛像が雜然と並べてあつて、其間には、點しかけの蠟燭が、汚い燭臺に歪んだまゝで置いてあつた。一人の小僧らしいものが出て來たのを定祥君が、頭を摑まへて私達に見せるのを見ると、其頭に澤山灸を据ゑた痕があつて、これが得度した證據になるのださうである。

犬ふぐりの花に似し花何ならん



この間の上海事變の時、元の第九師團司令部は、この天樂寺に置かれたのであるとの事であつた。續いて江灣鎭（キヤンワンチン）と云ふ處に行つて見た。そこは、小高くなつて居る一つの村であつて、前にやや大きなクリークがあつて、そのクリークの傍には、何の木か知らないが四五本立つて居つた。一寸感じを云ふと、私の鄕里の鴨川のお燒店のある處を思ひ出すやうなところであつた。其一方の麥畑の中に立つて、定祥君が說明する處によると、林聯隊長はそこにある人家の後ろのクリークの前で討死したのであるとの事であつた。栗原少尉が奮戰したのもまた此處であると、其地點を指し示した。

上海事變の時分、新聞でよく見てお馴染になつて居た閘北（ザホク）と云ふ處を通つて見ると、家屋の半壞全壞のものが澤山あつて、何れも砲彈の偉力を思はせるものがあつた。上海神社と云ふ白木造りの神社が、忽然そこに現れたのは心を惹いた。是は日本の兵隊の戰死したものを祀る神社であるとの事であつた。我が陸戰隊の兵舍は、其近所の北四川路と云ふ處にあつて、ボツ〳〵日本の水兵の散步して居るのにも出會はした。

それから、乍浦路（チヤツプフール）の月廼家に落ちついて、晝飯を食うことになつたが、暫く時間があつたので今見て來た景色の卽景五句を作ることになつた。

上海に來て月廼家の櫻餅

この月廼家の主人靖二君は、十二三の頃から知つて居る人であるが、今年もう四十一歳になるとのことであつた。此間火災に會つて、其建物の大部分は燒いたのださうであるが、燒け殘りの大廣間に通して歡待して呉れた。

それから、十六輔（セロツポ）を通過し、サー・ロバート・ハートの銅像のある稅關前を過ぎて、華西ホテルやパブリツク・ガーデンの前を通り、ガーデン・ブリツヂを渡り、日本領事館を右に見、二十四階建のブロードウエー・マンションを左に見、舊城內の王一亭氏を訪うた。この事は別に記錄したので、こゝには略する。

それから、フランス租界を一寸通つて、一番商賣の盛であるといふ大馬路（ダマル）や四馬路（スモル）を過ぎ、その四馬路の馬敦和（モートンウ）と云ふ店で、靖二君が私に支那の帽子を買つて呉れた。その帽子を被つて月廼家に歸つた。

直ぐ近所の味雅と云ふ支那料理屋で、歡迎宴があるので、そこに行つた。俳人、歌人、愛媛縣人などを交へての宴會であつた。自己紹介やホトトギス初入選の感想談などあつて賑やかであつた。

定祥君の雇つた黄包車（ワンポオ）（人力車）にて、武昌路、東本願寺別院のすみれ會主催の句會に臨んだ。電信局長嬉野波樓、領事館警察部長上田一歩君以下五十餘人の人達の會合であつた。句評を試みて十一時過ぎ散會。

これより前、章子は、味雅の宴會が濟んでから、月廼家の女將、星野夫人、下村夫人等と一緒に、グランド・シアターと云ふ活動寫眞に行つて、十一時十五分過ぎごろメトロポールのダンス場に行つた。私も會が濟んでから、穆水、荏吾、非文、楠窓君と共に章子を迎ひかたゞ〳〵行つて見た。これは支那人のみのダンス場であつて、支那のモダンボーイ達が、支那のガールを擁して踊つてゐた。

十二時十五分過ぎにメトロポールを出て船に歸つた。一時頃就寢。都合があつたので又もとの部屋に移る。

二月二十五日。

朝、穆水君が船に迎へに來たので、十時過ぎ楠窓君と私等親子は一緒に出掛けた。霙が降つて居て、これと云ふ仕事もない苦力は寒さうにぼんやりと埠頭に立つて居た。最前穆水君が自動車

を雇うて、こゝに待たせて置いたのださうであるが、其自動車は他のお客を乘せて行つたものであらう、捜しても居なかつた。別の自動車を電話で呼ぶ間、私達はしばらく埠頭に待つて居た。

月廼家の別室に行つた。そこは靖二君がお弟子に鼓の稽古をする場所になつて居るので、その二階は、抱への藝者達の居る場所になつて居るのださうである。

十一時十分前に別室を出て、月廼家の本館の裏口から這入つて臺所に行くと、丁度電話がかかつて居て、月廼家の女將が出て居るところであつた。靖二君が代つて電話口に出て、東京からかかつて來た國際電話であるらしいと云つて私に受話器を渡した。受取つて耳に當てると「ハロー ハロー何々」と流暢な英語で云ふので、私には分らなかつた。そこに立つて居た嬉野電信局長に代つて聽いてもらふ。嬉野君は「ハロー〳〵」と物慣れた英語で受答へして、暫く經つてから私に「出ました」と云つて受話器を渡した。立子の聲が聞えて一寸話すと、それから糸子、水竹居、風生、青邨、あふひの六人が代つて出て、三分間の時間はまた〻く間に經つてしまつた。

別室に歸つて、霙といふ題で俳句を作つた。そのうち御飯になつて、また本館のダンスホールを改造した部屋に行つて、王一亭經營の功德林の仕出しの淨菜（精進料理）の御馳走になつた。是は、特に王一亭の息子の王傳燾の口添へになつたものださうで、列席の諸君も是程旨い精進料

理を食つたことは無いと云つた。晝飯が濟んでから俳句の選をした。霙がいつの間にか雪になつてゐた。

別室に歸つて揮毫。三時半船に歸つた。船に上つて見ると、山本改造社長に出會はした。二三日前から此地に來て居るのださうで、社交室でここから乘つた長谷部少將に紹介した。甲板に出て見ると、雪交りの霙の降る波止場に、見送人は皆濡れながら立つて居た。

船室に歸つてから、私は眠らうとして寢臺に横はつた。章子はライティング・ルームで手紙を書いてをつた。

充分に眠れなかつたので、また甲板に出ると、右舷に美しい町が見えた。是は吳淞の町であつて、間もなく黄浦江の本流に合する處に出た。忽ち一望際涯なく海としか思へない揚子江となつた。

晩食、船が停つた。潮待ちの爲である。今夜は早く眠らうと思ふ。」

二月二十六日。

曇。

昨夜、東京日日から電報が來て、『春の七草。菫、蓮華草、蒲公英、土筆、菜の花、薺、春蘭の順に選ばる。御異存なきや。御感想と俳句二三を乞ふ』と云ふ無電が來た。『異論なし、唯菜の花を一位に置きたし』それに近詠二三と、又簡單な上海の感想を附加へて返電した。今まで認める間のなかつた手紙十數通をも認めた。

島らしいものを二三認めたが、或は大陸かも知れない。

上海の霙るゝ波止場後にせり
長江の濁りまだあり春の海

香港ドライヴウエー

二月二十七日。

曇。

朝甲板に出て見る。鷗が飛んで居るが、其色が長江の鷗とも變り、羽が灰色である。

春の海鷗の色のまた違ふ
鷲ほどの鷗が飛ぶや鵜ならんか

また島らしきものが見え、帆船五六艘が其方向に見える。

食堂から歸りがけに、楠窓君、横光君、章子と共に海圖室に至り、船長に海圖を見せて貰ふ。此邊は、厦門の沖であつて、島と見えたのは陸地であらうとの事である。左舷に澎湖島が遠くないとの事で、それは此處から見えないかと聞くと、澎湖島は低い島であつて、船が繋つて居るとマストの方が高い位であるから、こゝからは見えぬとの事であつた。それから船長は語を繼いで「時に今朝ニュースが這入つたが、日本は大變な事が起つて居ます。齋藤内大臣、岡田首相、渡邊教育總監等が暗殺されて、高橋藏相以下傷いたものも澤山あるとの事であります。」との話であつた。皆默然として其話を聞くばかりであつた。

大陸の見えて帆船霞みけり
水仙に日本のニュース聞いてたゞ

晝前に一艘の船が行手に現れたが、其船は容易に近づかなかつた。長谷部少將や横光君と誓く

見て居る中に晝飯になつたので、食堂に下りて、ボーイに其船はいつ頃此船と摺れ違ふであらうかと聞いた處が、ボーイは、其船はこちらへ來て居る船ではなくて、向うに行つて居るのであるが脚が遲いので、段々此船に追付かれて居るとの事であつた。ゆつくり御飯を濟まして、また甲板に出て見ると丁度其船は我船と平行して進んで居るところであつた。此事は別に記錄したものがあるので茲には省く。

章子甲板にて遊戯。

晩食後活動寫眞があるのを行つて見る。香港の景色が映寫さる。

二月二十八日。

朝七時起床する遑もなく、旅券の審査があるから、旅券を待つてスモーキング・ルームまで來てくれとボーイが云つて來た。船はもう香港に著いて居るのである。寢卷の上にナイト・ガウンを羽織り、スモーキング・ルームに出かけて行つた。丁度日本の海軍士官の旅券を檢査して居る處であつたが、どこに宿泊するか、どこまで行くかなどと、可なり冗い質問をして居たやうである。審査官は英國人で、三人ばかり居つたが、其態度は紳士的であつた。私達の審査は簡單に濟

んで、別に質問も發せず、判を捺して吳れて事は濟んだ。それから湯に入り食事をして居る處に三菱商事の下田幸三郎君が來てくれたので、例により機關長室に通した。

船は九龍の棧橋に著いて居るのであつて、是からフェリーで香港に渡つて、萬事下田君に案內して貰ふことになつた。甲板から見た香港の景色はよかつた。家は海岸から山腹に連り、頂上迄達してをる、それが皆岩の上に煉瓦やコンクリートで建つてゐるので見るからに美しい眺めであつた。我船の繫つてゐる九龍といふのは香港島の對岸の大陸の方であつて、澤山の船が彼我の間を往來してゐた。大分暖になつて居る筈なので、薄いシャツ、袷に著替へ、外套も夏外套に改めて出掛けた。

澤山船のかゝつて居る中に、驅逐艦の夕霧が碇泊して居るのが目に止つた。外に佛國の驅逐艦が二隻かゝつて居た。昨日我船に追ひ越された常磐丸が、もういつの間にか別の棧橋にかゝつて居るのが見えた。長い〳〵九龍の波止場を歩いて、スター・フェリーと云ふ渡舟に乘つた。

香港には僅か十五分許りで著いた。海岸一帶に建ち並んでゐる洋館の中に郵船會社もあつたが其前を過ぎて、電車の通りに出た。支那人が雜然と通つて居る中に、西洋人も混つて居た。人力車や轎子と稱へる駕などが追ひかけて來て頻りに乘ることを勸めるのである。ゴーストップの紅

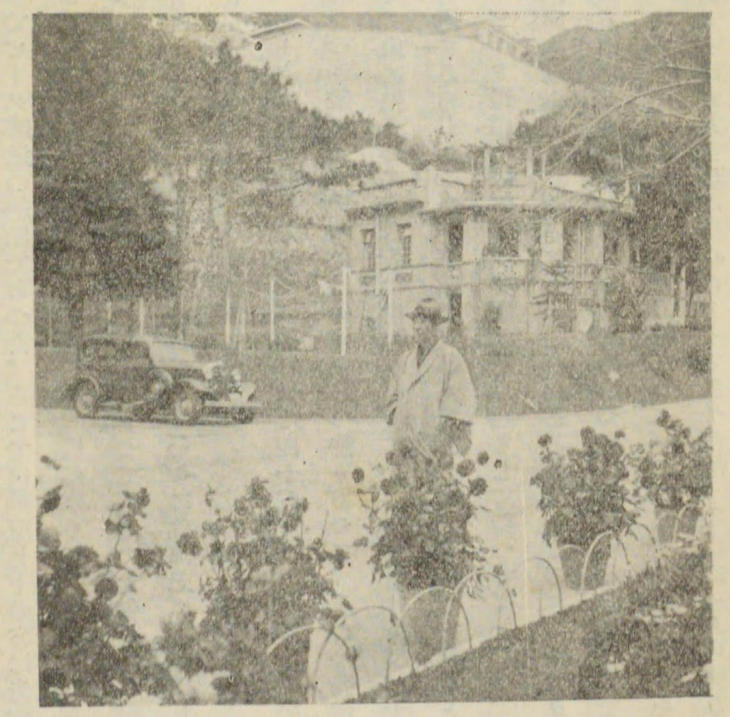
い玉が出て居るに拘らず、下田君が先に立つて電車路を横切つたので躊躇して居た私達もその後に蹤いて横切つた。後で下田君に、ゴーストップの標識にかゝはらず歩くのですかと聞いて見たら、電車や自動車は其に從ふものですが人は構ひませんよと無造作に答へて居た。電車路を横切つて、そこから二三軒目の三菱商事會社に行つた。今日は定めて暑いだらうと覺悟をして衣を替へて來たのであつたが、なか〳〵に寒くつて、頻りに小便に行つた。大每の特派員足利緝君が來て暫く談話をした。

下田君に案內されて支那人の自動車に乘り、島巡りをすることゝなつた。坂を上つて行く路傍に、マンゴーの木や椰子などがあるのが目に著いた。總督府の官邸を右に見て上つて行つたのであるが、一寸東京の靈南坂とか永田町とかに似て居る感じで、道幅はそれより狹いけれども美しい道路であつて、左右に建ち並んで居る家も感じのよい家許りであつた。それから、香港を一周する自動車道に出て、島の裏手の方に廻るのであつたが、香港の町や澤山の島々の碁布して居る海を見下ろして景色がよかつた。墓場があつたり、デイリー・ファーム（牧場）があつたり、その牧場には贅澤な牛舍が建ち並んで居つて、其近處には、牛の飼料にする爲に作つてある麥畑が山腹に連つてゐるのが見えた。

アバデーン・ベイと云ふ處で車を止めて、章子が寫眞を撮つた。このアバデーン・ベイは未だ香港が開けない前からあつた港であつて、もと海賊の巣窟であつたのであるが、八九十年前英國が阿片戰爭の結果この香港を占領するやうになつて、無毛の地であつた現在の香港の港を拓いたのである。こゝには澤山の大小の支那の戎克が今も尙輻輳して居つて、その特徴のある帆を揚げた戎克が、灣内を動いて居る樣が面白かつた。此邊には松の木が澤山あるが、是は日本から移したものであるとの事である。かと思ふと又熱帶植物のタコの木などもあり、芒が穗に出て居るかと思ふと、躑躅の花が咲いてをり、佛桑花が赤い花を附けて居た。

次に、リバルス・ベーと云ふ避暑地らしい別莊風の建物が四五軒建ち並んで居る風光明媚な處に出た。章子がまたこゝで寫眞を撮つた。傍のバンガローに立ちよつて茶を飲んで、四人で暫く話した。そのバンガローの外面には、ダリアの花が澤山の鉢植に植つて整列して居つて、室内には深樹(サムシュウ)や椰子の鉢植が置いてあつた。支那人のボーイがハイカラな風をして立ち廻つて居た。振り返ると、一本のパパヤの木が砂濱に突つ立つて居るのが見えた。ボーイに其沖に浮かんで居る舢舨(ヂッペー)の蒲鉾形の篷を何と云ふかと聞いて見たら、船篷(シュンポン)と云ふと答へた。

自動車路の一番高い處のピーク・ホテルの前で下車をした。そこは海拔千三百呎のところであ



香港リドーの入口にて

つてピーク鐵道の終點であつた。そこで自動車を下の方に先廻りさして、私達はピーク鋼索鐵道で下ることになつた。立つて居ると、風が寒くて震へる位であつた。目前の建物の前を、雲が走つて居た。ピーク鐵道の入口に札が下つて居るのを何心なく讀んで見るとNames and Addresses of Peak Residents.とあつて、そこに此山上に住まひして居る人の名が列記してあつたのを見た。それは澤山ではなかつた。

ピーク鐵道に乘つて見たが其勾配は四十五度の角度をして居る處もあつて、頗る急であるのにちよつと驚いた。途中に停留場が三つ許りあつて、そこに皆何々ロードと云ふ立札が立つて居つた。山に住まつて居る人は自動車の便によるのでなければ、大方皆このピーク鐵道を利用して、昇降するらしかつた。車掌は支那人であつて、乘客は支那人と西洋人とが混つて居た。

ピーク鐵道の終點に自動車が先き廻りして待つて居たので、それに乘つて市街に下りて、金龍酒家と云ふ支那料理店に行つたのであるが、そこのエレベーターの前に人が群集して居たのは丁度食事時であつたからかもしれなかつたが、一寸三越のやうであつた。

エレベーターで上つて風月廬と云ふ一つの部屋に通つて、そこで支那料理の御馳走になつた。ボーイは大方支那の男のボーイであつたが、其中に一人可憐な支那の娘も混つて居た。屏風とも

衝立ともつかぬやうなもので一間を區切り、向うには別に支那人の一隊が陣取つて居た。こゝはいつもこの通り繁昌する料理店であるとの事であつた。ボーイにこの屏風のやうなものを何と云ふかと聞いて見たら枡門と書いて見せた。私が、屏の字を書いて見せると、ボーイは頻りに肯いて、屏の字を消し、木で作つてあるから枡門と書いたまでだ、屏の字の方が正しいと答へた。途中から來た三菱の原清君が通譯してくれたので、總てそれ等の事を話すことが出來た。

そこを出て、原君の案内で、町の様子を見ることになつた。蜜柑を賣つて居る老婆があつたがあれは汕頭蜜柑と云ふ頗る美味なものであるが、日本には輸入を禁止して居るので、絶對に内地には入らぬとの事であつた。

大道で衣服を縫つてゐる苦力の女房達も目に止つた。

支那町の殷賑な處に出た。肩摩轂擊と云つた様な鹽梅に支那人が歩いて居るのであるが、鳥の脚や魚や野菜の類を藁や紐で縛つて提げて居る男女に澤山に行き會つた。支那人の夕食は五時にとるさうであつて、丁度その夕食前に當つて居るので、市場から買求めたものを皆裸のまま紐で縛つて、ぶら下げて歸るのであることが分つた。其雜沓の中に盲目の胡弓彈きの娘が、路傍の柱を背にして白い眼を剝き出して淋しく立つて居るのや、公然博打をうつてゐる一團や、往來で衣

服を縫つてゐる苦力の女房達があるのが目に著いた。

百貨店に這入つて、それから活動寫眞のある前を通り、オフイス街に出て、セントラル・パートと稱へられて居るヴイクトリア女皇の銅像のある廣場に出た。その銅像の前に立つて、暫く休んで居ると、一人の支那人が、ポケツト・マンキーを紐で縛つたものを連れて、こなたに近よつて來るので、可愛いマンキーだと思つて見て居ると、その男は私等の前に近づいて來て、そのマンキーに藝當をさすのであつた。猿は、頭を地に付けて、蜻蛉返りをしたりするのであつたが、猿が云ふ事を聞かぬと綱を引張つて宙に振り廻したりするのを見て興が醒めて來た。男が手を出すので、原君が五錢の小錢を與へた。また私の前に帽子を脱いでその帽子を逆さまにして突き出して笑顔を作つたが、私は首を振つて與へなかつた。

それから、香港上海銀行の前を過ぎて、日本郵船會社に行つて、支店長に一寸挨拶し、また三菱商事に行つた。下田君は、章子に、海水著を一著呉れた。五時過ぎになつて、また自動車に乘り、ケネデイー・ロードの千歳花壇と云ふ處に行つた。そこは、先刻の島を一周した道路とは反對の方向で、また少し島を上つて香港の町を見下ろす處になるのであつた。自動車を下りて、道路から先づ千歳花壇の屋上に下りて、其屋上の入口から、二つ許り階段を下りて、座敷に通るやう

になつてゐるのであるが、其下に降りるより前に、屋上で下の景色を見下ろして章子は又寫眞を撮つた。

さて下に降りて行くと、支那人が一人居つて、其支那人が大きな聲をして怒鳴つたが何と云つたのか聞きとれなかつた。が、直ぐ向うの方で一人の日本の女の聲がして、お八重姉さんと呼んだので、さきの支那人が呼んだのも、お八重さんと云つたのだと思はれた。其お八重さんといふは、頸筋に白粉を白く塗つて、不斷著のままで現れて、碌にものも云はないで、私達を座敷に導いた。座が定まつてから、お八重さんは生れはどこだと聞くと、京都と答へた。京都にしては言葉が違ふやうだと云ふと、

「永年海外に出て居りますので、つひまじりますのどす」

と始めて京都言葉らしいのをつかつた。續いて松千代、久千代と云ふ二人の藝者が現れて、酒間を斡旋して日本料理の御馳走になつたが、それ等のことは別に記錄する積りであるから、こゝには省く。

揮毫をしたりして夜を更かして表に出て見ると雨が降つて居た。自動車で九龍(クーロン)フエリーまで行き、そこから九龍に渡り、そこの長い波止場を歩いて、箱根丸に歸つたのは十一時であつた。機

關長の室で私の揮毫したものに印を捺して、それを持つて下田君は直ぐさま引返して歸つた。それから楠窓君と甲板に出て、香港の灯を見たが、もう大分更けてゐたのと、春雨の雲が山を蔽うて、麓の方の三分の一位ほか見えなかつたのは殘念であつた。香港の夜景は世界の港の三大美景の隨一であるといふ評判であつて、夕方に船に歸つた人は其を見ることが出來たと誇りがにいつてゐた。併し大體想像はつくのであつて、先づ神戸の夜景を大きくしたやうなものであらう。

上陸し相逢ふ客や更衣

パパイヤの一本立てる春の濱

椰子高く聳えし宿の鉢つゝじ

椰子ありて烏はをらぬ島の春

香港に支那の夏服娘にもとめ

二月二十九日。

朝早く甲板に出て、香港の港の朝景色を見た。矢張り雨が降つて居た。

香港の春曉の船皆動く

春曉や戈克にわめく人の聲

寒いので船室に歸らうと思つて、誤つて隣室のドアを開ける。西洋人の夫婦の室であつた。後で女ボーイに賴んで斷りを云つて貰ふ。

湯に入つたが、睡眠不足で頭がぼんやりして居る。甲板に出て、船の香港島を廻つて出て行く景色を見る。

東北大學助教授成瀨政男博士が部屋に來た。しばらく談話してから、機關長の部屋に連れて行つた。

睡眠。章子も亦。

眠りが覺めて晝飯。章子は尙眠りつゞけて居る。歸つて見ると章子は部屋で食事を濟まして居る。

玄海よりも大きな波がある。

春潮や窓一杯のローリング

夜、楠窓君の部屋にて俳句會。會者長谷部照悟、奥村彩坡、横光利一、成瀨政男、柴虚風、それに楠窓、章子、虚子。

南支那海

三月一日。

昨日以來船の動搖が甚しいが、章子はもう慣れて平氣になつた。

時計がまた三十分遲れて居るのを知らないで湯に入つたが、八時三十分の朝飯までは大分時間があるので、甲板を散歩して、俳句を作るともなく書き止める。

薫風や楊枝くはへて水夫立つ

月の如く雲間に夏の日ありぬ

ふんまえて南支那海風薫る

人涼し荒るゝ海見て立ちつくす

社交室に行つて見る。

卓上の桃あわて咲き葉を出しぬ

朝飯後眠くなつたので寢る。

晝食の時分に、岡田首相が生存して居つたと云ふことを聞いた。

甲板に出て、初めて指定してある籐椅子に腰を掛ける。

天氣が見る〳〵中に晴れて來る。飛魚がしきりに飛ぶ。

楠窓君の部屋に行つて、筆記をして貰つて居る中に、また雨が降り出して來たらしい。

五時半頃甲板に出て見ると、矢張り雨が降つて居て、密雲が空を蔽うて居るのが見える。

章子が夏服に著替へる。しばらく扇風機をかける。

甲板をよろめき歩りき籐椅子に

籐椅子出すボルネオ海を航行す

三月二日。

今朝は船の動搖がやゝ鎭まつた。天氣が晴れて、甲板に當つて居る日を見ると、眞夏の光である。

我船の影夏海にそひ映る

白墨に輪投の線や船涼し

甲板を洗うて涼し輪投する

今日から船員は皆夏服に著替へた。私も單衣にした。

甲板に佇んで居るところに、柴君が來て、「髪を結ふ一茶」を觀た話をする。

吉右衛門に

髪を結ふ一茶の話船涼し

右舷に安南の陸地の山が近く見える。章子に其寫眞を撮らす。

朝食の時分に、楠窓君、昨朝の海水の溫度が七十度であつたのが、昨夜はもう八十度になつて居たと云ふことを話す。

食後、楠窓君の部屋に行つて筆記をしてもらふ。

暫く無電が來なかつたのが三通來る。其中に、水竹居氏の無電に、

「皆無事、安心乞ふ。こちらは騒ぎも鎭定、空晴れ、長閑に、雛祭する。」

とある。

午前理髪をする。

甲板に立つて居ると、左舷に一つの島が見える。丘の中腹に畑があるらしく、人家もあるらしい。

孤島ありて麥畑ある洋の中

洋上や遙に薄き雲の峰

甲板に日覆の蔭の黑々と

大濤に左舷傾く時涼し

籐椅子は左舷輪投は右舷かな

支那人の三等客の跳足かな

島つひに見えずなりたる雲の峰

四時、社交室で楠窓君が私の俳話と俳句朗讀のレコードをかけて、此頃船の上で俳句研究を始めた人々に聽かせたとのことであつた。

楠窓君の部屋で口授筆記をしてをると、吉岡利起君が見えて挨拶する。

晩食後南十字星を見ようとボートデツキに出て見たが、雲があつて見えなかつた。艦にある映

晝を見に行く。シンガポールの景色等が映寫された。

頗る暑い。私が部屋に歸つた時分に鼠がちよろ〳〵走るのが見えた。

夜半小便に起きた序に、舳の方に行つて見た。一天晴れ渡り星は澤山輝いてゐたが、どれが南十字か十分に判らなかつた。

乘客暑し南十字を見んと集ふ
星涼しメーンマストは稍かしぐ

三月三日。

海は靜かで疊の上にゐるやうになつた。

今日から浴衣を著て、其上に袴をはくことにした。西洋人のシヤツ一枚に半ズボンのものもあるのであるから、其で差支無いことゝ獨りで極めて、その服裝で、朝も晝も食卓に著くことにした。

十時浮袋(ライフベルト)を著けた。今度は二回目なので、唯甲板に出ただけで仕舞ひになつた。が、浮袋を解いてからボートの操練を見た。總てのボートが轆轤で皆本船を離れて、海の上に突き出て、その

香港、千歳花壇屋上——上ノ畑鋼怒、虚子、章子

上に二人の水夫が乗つて多少の動作をしたが、また轆轤で元の位置に戻して、ボート臺に定著しそれで操練は終つた。ボートを船から下ろすにも可なり時間のかゝるものであると云ふことが分つた。

午後また口授筆記。「黄浦江」(大朝)、「南十字星」(大毎)。

今日は雛の日なので、朝の食卓のメニューにも雛祭の繪葉書が附いてをり、また三時半のお茶にも櫻餅を部屋に持つて來て呉れた。

午後四時から、スモーキング・ルームの外のヴェランダで句會をすることになり、スモーキング・ルームに、女ボーイの八木さんが、章子が出發の時に貰つた二三の雛を飾つて呉れた。雛祭、更衣の題で句會。集つた人は前回よりも更に數人が加はつた。其新しい人には寺井俊治、増田義男、落合麒一郎、宮崎市定、吉岡利起、八木みね子などであつた。

食卓のメヌーに雛や雛の日
船室に雛の日とて櫻餅
雛祭南十字の星の下
衣更て甲板に出ぬ島見ゆる

衣更て海穏かになりにけり
赤道にいよ〳〵近づく雛祭

夜また口授筆記。「久千代」(中央公論)。夜十一時過ぎまでかゝつた。十二時近く眠りに就く。

赤道の夕燒雲に船は航く
この船に伴ひて來し洋の月

新嘉坡、ジョホールを訪ふ

三月四日。

新嘉坡の棧橋に著く前に、ランチで英國の役人が來て旅券檢査を八時から始めたが、それは新嘉坡に上る旅客のみで、私等には無かつた。間もなく船は棧橋に著いたらしい。食堂に行く。石田敬二、東森たつを二君機關長室に來て居るとの事で、楠窓君が先づ食卓を離れた。

私も間もなく機關長室に行かうと思つて部屋を出る時分に、奥田彩坡君が下船につき挨拶に來、同時に、三井物産支店長松本季三志君が奥田君に伴はれて挨拶。松本君の細君は、目黒野鳥君の令孃であることは前から奥田君の話によつて分つて居た。

機關長室に行くと、此地の新聞記者も來て居るし、三菱商事支店長の山口勝君並に社員宮地秀雄君が來て居て、何かと懇切に云つて貰つたが、萬事は石田君に任してあるので、その好意を感謝した。

章子が今朝部屋から出ると、皮膚の眞黒な印度人が、甲板を往來して居るのを見て驚いて歸つた。

石田君に引卒されて二臺の自動車に分乘、横光君も一緒に行くことにした。

新嘉坡の町を過ぎて行く時分に、交通巡査の印度人の脊中に、籐を編んだ板のやうなものを脊負つて居るのが目に著いた。ストップの時分は其板が遮斷するやうな方向に體を向け、ゴーの時分には通過するやうな方向に向けるのは面白かつた。

町には印度人、支那人、マレイ人、瓜哇人が打ち交つて通つて居た。五十萬の人口の中に、四十萬は支那人ださうで、後の十萬の中に、馬來人以下、各種の人種が含まれて居るのださうである。始めは印度人と馬來人との區分が一寸分らなかつたが、よく見て居る中に判然と區分されて來た。印度人の中でも、漆のやうに色の黒い比較的體格の小さいのは、パミール族で、最も低級な部類に屬するのであるさうで、同じ印度人でも、交通巡査をして居る體格の偉大な鍾馗樣のやうな恰好のは、ベンガル族であるさうな。馬來人は、印度人よりは寧ろ日本人によく似て居る皮膚をして居つて、今日は馬來の暦の替る元日に當る日だとの事で、赤や青の布を腰に纏うて著飾つて居る男女が多いのを見受けた。

中央郵便局の前を通り、市役所の前を通り、ヴイクトリア・シアタと云ふ活動寫眞館の前を通つた。街路が悉くアスフアルトで出來て居つて、其等の町はかなり殷賑な町であつた。

日は相當に暑いが、想像して居た程の暑さは感じない。然し、石田君等は頻りに暑い〳〵と云ふ。却つてこちらから、そんなに暑いですかと反問した。石田君は、昨日今日は最も暑いやうです、一年中で一番暑いと云つてもよい位です、この一月許り雨が無いので、こんなに暑いのでせう、と云つて居た。殆ど赤道直下とも云ふべき、この新嘉坡の暑さが案外なのには驚いた。併しさうはいふものゝ暑いには暑かつた。

一路ジョホールを指して行くのであるが、坦々たる鋪道であつて、そのジョホールに近い處の

道を、印度人や馬來人などが、ロールを轉がして新しく鋪道を作つて居るらしいのを見て、これは此頃作つた道ですかと聞いたところが、いゝえ、さうではありません、この印度人等は道をなほして居るのです、少し傷むと直になほすのです、と云ふのであつた。英國人は道路には常に金をかけて居るのであつて、後で聞いた話であるが、此道路はジョホールを貫いて、遠く印度のカルカツタに達して居るので、四五日かゝれば自動車で行くことが出來るとのことであつた。

その道の左右には、椰子の林や、護謨の林が續いて居、椰子の林の中には、支那人の家屋や馬來人の家屋があつた。

やがて、護謨の林を透して一帶の水が見えて來た。それは一見湖水かと思はるゝ樣な水であるが、新嘉坡の島と、ジョホールとを隔てゝ居る海水の彎入して居るのであつた。疾走して行くに從つてだん〳〵と對岸のジョホールの建物も見えて來た。やがて、新嘉坡とジョホールとを結び付けて居る一つの橋の上を通過する。この橋は數年前迄無かつて、渡舟で渡つて居たものであるさうだが、今は埋め立てた橋になつて居て、汽車のレールも其上を通つて居た。その汽車は、暹羅まで行つて居るのだと云ふ話を聞いた。

その橋を渡り切つた處にジョホールの稅關があつて、一人の馬來人が車に近寄つて來たが、大

した誰何も受けずに通過。海に沿うて疾走。雨の樹(レーン・ツリー)と稱する樹が並木のやうに海の畔に並んで、其下にある大きな石の上に馬來人が腰をかけて、ポカンと海の方を見て居るのなど、涼しげな一幅の畫圖であつた。右手の小高い處に王宮があつたが、王宮と云つても、二階建の小さい建物であつた。そこには下りずに車で疾走したばかりなので、或は誤りがあるかも知れないが、二階建でなかつた處で高々三階位の建物であつた。その前には廣い芝生があつて、花壇もあつたやうに思ふ。

回々教の寺院に行つて見た。それも、大した建物ではなかつたが、前の王宮よりは立派であつた。階段に馬來人がぼんやりと腰をかけて居るので、章子が寫眞を撮らうとすると、他に尙二三人の人が現れて來てカメラに入つた。私達もその人々に混つて寫眞を撮つた。それ等の人は皆この寺院の僧侶であるさうな。

水の上に突き出たやうに建つて居る、馬來人の家の一團がある。また、アダツプと云ふ椰子の葉で葺いた家が一番涼しいと云ふことであつた。

また、長驅して士乃(セナイ)の護謨園を訪ふことになつた。これは、奥田彩坡氏が專務取締役をして居る護謨園であつて、こゝから未だ大分距離があるのであるが行つて見ることになつた。暫くは護

謨の林の中を行くのであつたが、紅葉して居る護謨の樹が非常に多かつた。

殆ど護謨の林の連續して居る中に、多少人家があつて、そこは食物店とか、小賣店とか云ふものがあるところを過ぎると、一萬エーカーあると云ふ士乃（セナイ）の護謨園に這入つて行つた。右折して護謨の林の中に這入つて行くと、馬來風の建物を參酌して建てたやうな、床の高いバンガロー風の建物があつて、一人の青年が出て來た。軈てその細君も出て來て挨拶をしたが、奥田君は未だ歸つて來ないと云ふ事であつた。其建物の前に立つて居る椰子や、檳榔樹を打仰いで暫く佇んだ。名を聞きもらしたが、尖の方が覇王樹のやうになつて居る一つの木に、法螺の貝のやうなのが喰付いて居るのを、指せるまゝに見て居ると、あそこにも〳〵と澤山居ることに氣がついた。それはヂヤイアント・スネールと云ふ大きな蝸牛であつて、法螺の貝と云ふのは少しく誇張に過ぎるが、斯う云ふ大きな蝸牛が居ると云ふのには一寸驚いた。何でもこの蝸牛は、最近突然此邊に現れ始めたものであつて、是か椰子の新芽につくと、忽ち喰ひ盡して、椰子を枯して仕舞ふさうである。

鰐が居るとの事で行つて見ると、金網が張つてある箱の中に、一間位の鰐が這入つて居た。棒の先で怒らすと、恐ろしい勢で棒に喰ひ付くのであつた。

やがて勧めらるゝまゝに梯子段を上つて行くと、其階段の右側に三間位ある大きな剝製の鰐が懸つて居るのを見た。それは彩坡君が鐵砲で打取つた鰐であるとの事であつた。

印度人が、椰子酒を採る爲に、椰子の木に登つて行くところを見せて呉れた。眞黒な細長い手足を持つた印度人が、椰子の幹を傳うて、蜘蛛のやうにへばり付いて椰子の幹を上つて行くところは、嘗て活動寫眞で見たことがあつたが、今はそれを目のあたり見るのであつた。活動寫眞の時は氣が付かなかつたが、椰子の幹が少しづゝ刳り取つてあるので、そこを足場にして上つて行くのであることが分つた。それにしても長い椰子の幹を猿のやうに上つて行くのは、危つかしい心持がするのであつた。やがて、葉のある處迄上ると、一枚の葉の上に乘つかつて動作をするのであるが、よく葉が根本から折れぬものであると心配である。葉の新芽を庖丁でさくつと切つて、そこに腰にして居つた壺をぶら下げると、其葉から出る汁が其壺に溜まる。それを一晩置いておくと椰子酒になるのださうだ。章子が寫眞にとる。

お茶、コーヒー、ソーダ水等の御馳走になつたが、また椰子酒をも勧められるまゝに少し飲んで見た。酸つぱいやうな味のするものであつた。

一羽の小鳥が最前から頻りに鳴いて居た。鶯の谷渡りのやうな鳴き工合であるが、それに九官

鳥のやうな、どことなく甲高い鋭い聲が混つて居た。何と云ふ鳥であるのかと聞いて見たが、よく鳴く鳥だと云ふ許りで名を知つて居るものは一人もなかた。鳥の話になつて、極樂鳥に似た、鴉の尾の長いやうな鳥も少し奥に這入ると居るとの事であつた。

其所の壁にジョホールの地圖がかゝつて居つたので、ジョホールはどれ程の廣さがあるのですかと聞いたら、さあ、日本の四國位の廣さでせうとのことであつた。其地圖で見るとジョホールは殆ど護謨園で國内が青く彩られて居た。

又護謨を採る處を見せてやらうとの事で、工場の方に行つて見たが、工場の傍にある一本の大きな護謨の木の皮を削ると、その皮に出來た溝の上を白い液體が直ぐ流れて來る。これが精選されて護謨になるのであるとのことであつた。そこでも一二枚寫眞を撮つてから自動車に乘つた。

歸り道に王の墓を見ようとの事で、先の回々教の寺院の手前から道をそれて、王の墓と云ふのに詣つた。一人の馬來人の僧が先に立つて說明して呉れた。大きなドーム形の殿堂の中に、王、王妃などの柩を其下に埋めた大理石の墓が並んでゐた。これは少し西洋かぶれのした、近代的のものではあるまいかと思はれた。却つて、その殿堂の外部の墓地に並んでをる小さい墓の方が、古風でいゝ感じがした。是は歷代の王族の墓であるとの事であつた。馬來人は死ぬると云ふと、

メッカの方を向かして埋めて、その頭と足の處に二つの小さい墓標を立てるのださうで、その小さい墓標が澤山並んで居るのが興味があつた。

そこを出てから、一路長驅して新嘉坡の方に歸つて、椰子の林の中にある住宅地を過ぎて、タンジョン・カトンと云ふ處の玉川ガーデンと云ふ、日本で云へば海岸の松原の中にあるやうな、こゝでは澤山の椰子の林の中にある一つの料亭の前に車をとめた。廣い芝生の中に、正面には白堊の支那風の建物があつて、その裏の海に突き出て居る橋を渡つて、六角形の水亭の一室に私達は導かれた。其隣室には、澤山の日本人の女の人が、子供を連れて居るのが目に止つた。後で聞くと、三井物産の家族の人々が一日の休養に來て居つたのだとの事であつた。海水は今引潮時で、水亭の下は干潟になつて居て、其干潟の先の所には琵琶湖で見るやうな魚が二三個所建てゝあるのが見えた。東の方には、海を隔てゝ和蘭領のリオ群島が青く見えて居た。海岸に連つて居る椰子の林をこゝから見ると、また特別の風情があり、印度人や馬來人などが砂濱を通つて往來して居るのが見えた。一人の馬來人のお婆さんが、蝙蝠傘をさして、砂濱で何かを掘つて居るのも見えた。印度人が、鈴を鳴らして物を賣つて歩くのがまた目についた。鶺鴒が海岸の石垣の上を飛んで居り、燕が又椰子を掠めて飛んで居るのも見えた。此邊には、一年中燕が居るとの事であつ

た。

御馳走の中には大きな蟹の厚ぼつたい固い爪を割つたのがあつて、頗る辛い唐辛の醤油で食うのであつた。女將と思はれた女は、横濱の女であつて、國を出て三十年位になるとの事であり、他に二三人の齢を取つた女が居たが、何れも色の悪い無口な哀れな女であつた。

石田敬二君の家に立より、アモタン、ボアチツク、マタナリン等の果物を出されて、一つ二つを喰べて見た。今は果物の無い時分であるとの事であつた。石田君の取り出した畫帖、色紙、短冊等に揮毫した。

植物園に行つた。そこは今日の吟行の場所である。自動車を下りると、そこに先著の楠窓君が立つて居て、先づ志村空葉、玉木北浪二君に紹介された。空葉君は門内に直ぐある寶冠木、蟲がついたために最近刈つてしまつた無憂華、池の傍に鬱蒼と茂つて居る榕樹等を説明しながら、池の畔りへ行つた。そこには桑原梅女を始め十數人の俳人が居て、記念撮影をした。園内を逍遥して居る英吉利人や、美しく著飾つて居る馬來人等が私達の方を見まもりながら行き過ぎるのであつた。それから池の中に生えて居る瓜哇の睡蓮、池の畔にある暹羅の合歡木、大風子の木等、送迎に遑のないほど熱帶の植物を一々紹介されたが、其中に大海椰子と云ふ大きな椰子の木があつ

シンガポール植物園――Coco de Mer といふ珍しい植物

た。是は原産地は錫蘭の附近の島であるさうで、海を漂うてゐるこの實を、航海者が眺めて何の實かわからず、久しい間疑問にしてゐた。ゴルドン將軍もこの實の漂うてゐるのを見て、アダム・イヴの禁斷の實と云ふのは、この實の事であらうと云つたと云ふ話もある。この實は遠く海を漂うてペルシヤ、西班牙、または阿弗利加のザンジバル島あたりまで流れ著いて繁殖して行つた。實から芽が出るのに八年もかゝり、其木が成長して實が生るのに孫の代までもかかると云ふ。此池の畔にあるものはまだなか〳〵實が生るどころの騒ぎではなく、大海椰子としては幼少なものであるとの事であつたが、然し素晴らしい偉大な葉を翳して居つた。その蔭には十人許りの人が雨宿りが出來さうであつた。その下に私等が立つて居るのを章子が寫眞に撮つた。

それから、猩々椰子と稱へる、幹の皮の赤い、椰子と云ふよりも寧ろ檳榔樹に屬するものであるさうだが、それが池中の島に突立つて居るのなどが目に止つた。他に種々の樹が鬱蒼と木の下を暗うする許りに茂つて居て、一々それ等の木の説明をも聞いた。火焔樹の花と云ふのが地上に落ち散つて居るのを採り上げて説明して呉れた。

それから、澤山の蘭科植物が集めてある處にも行つて見たが、少し足がだるくなつて來たので私達は志村君の自動車に乗つて野生の猿が居るところに行つて見た。二三疋の猿が人に慣れ〳〵

しく出て來て、章子が寫眞を撮るのに逃げ隠れもしないのが可愛らしかつた。それから志村君の家に立寄つた。

奥さんに面會、章子はこゝで湯に入れて貰つて、奥さんと後から會場に來ることになつた。志村君と、楠窓君と三人で新喜樂に行つた。

そこで晩飯の御馳走になる。晝間玉川ガーデンで喰つた蟹がまた出た。鼈の鍋も出た。仕舞ひにその鍋でおじやを作つて喰べた。奥さんも章子も後から來た。それから長い机を並べて一同がそれを取り圍んで句會を濟ませた。後で、熱帶の季題は如何に取扱つてよいものであるか、それに就いての所感を聞き度いとの希望が出た。私も今度實際の景色に接してそれに就いて意見を述べて見たいと思つて居るのであるから、何れホトトギス誌上で發表することになるであらうと答へた。

十一時半船に歸る。埠頭の船の前で、明日午前八時に石田君に來て貰つて、二葉亭の墓に詣り十時に奥田君の周旋して呉れる按摩に來て貰ふことを約束して、そこで諸君と別れて船室に戻つた。一時前寢る。

熱帶に來ぬジョホールも一見す

顔しかめ居る印度人町暑し
馬來人夏木の蔭に一人づつ
ひんがしにリオ群島や潮干潟
アダツプに今歸るなり夕涼し
著飾りて馬來女の跳足かな
走り出ぬ馬來女の跳足かな
裸なる印度ますらを幸きくあれ
晩涼や大海椰子の蔭に立つ
熱帶の日落つる椰子の林かな
晩涼や栗鼠現れて跳ぶ芝生
晩涼の火焔樹並木斯くは行く

三月五日。

午前八時に約束の通り、石田君が來て呉れた。待たせてあつた自動車に、楠窓君と章子と石田

君と私とが乘つて朝陰のある町を通つて志村君の處に車を止め、章子一人下りた。殘つた三人は直ちに二葉亭四迷の墓のある日本人共同墓地に長驅した。章子は志村の奥さんに連れられて買物に行く手順になつて居たのである。朝陰のある町には馬來人の一團が何もせずに唯集つて休んで居るのが見えた。

町を出離れた田舍道を通つて暫く行くと、漸く日本人の墓のあるのが見え出して、共同墓地の門内に自動車が這入つて行つた。其所に四迷の碑があつた。墓ではなかつた。此の四迷の碑を訪うた記事は別に短文にする積りであるから茲には省くことにする。

歸路、石田君の家に寄つて、勸められるまゝに尿の檢査をして貰ひ、血壓も見てもらつたが無事であつた。赤道近くに來てから足が少しむくみ始めたので、念の爲に見てもらつたのであるが別に異常は無いとの事であつた。それは暑さの爲であらう。

志村君の宅に立ち寄つたが、章子は奥さんと一緒に買物を濟ませて博物館に行つてゐた。

私達は先きに船に歸つて、此地で投函する文章を訂正。奥田君が按摩を連れて來て呉れたが、少し待たせて其文章の訂正が終つてから揉ませた。脚を逆さにさするやうにするマツサージが大變心持がよかつた。生れは何處の者だと聞くと東京日本橋の者で、丁度東京驛の出來かゝつて居

た時分、香港に來て、そこに七年、それから此新嘉坡に來てまた七年になります、始めは巴里か倫敦に行つて見る積りであつたのですが、遂にこの地に止まるやうになつて仕舞ひました、と云つた。

按摩が終つてから、章子と一緒に船まで來てくれた志村の奥さんが、社交室に居るのに挨拶をし、一緒に機關長室に行つた。石田、志村兩國手が其所に待つて居て、それに奥田君、三菱の宮地君が來てくれた。宮地君は彼南の案内をさす爲に、朝日ホテルの方へ電報を打つて置くとの事であつた。間もなく正午の出帆を知らせる銅鑼が鳴つた。

棧橋でそれ等の人が一團となつて見送つて呉れた。棧橋を見渡して見ると、西洋人の男女が澤山に並んで居て其々の人を見送つてゐたが、中には一團の人があつて手を繋いで一齊に聲を揚げると船からも大きな聲をして其に應じてゐるのなどもあつた。

船が動き出した。海中に錢を投げるとそれを潜つて拾ふ印度人が暫の間カヌーを漕いで船に蹤いて來た。

一寸船室に歸つてから甲板に出て見ると船は狹い水道を徐行してゐた。これは島の間を通つて居るのであつた。その出口に砲臺のあるのが目に止つた。

再び船室に歸つて眠る。眠りが覺めると大變に涼しい。雨が降つて來たやうである。甲板に出てまた船室に歸り日記を書く。

紹介狀を調べて分類して置く。

晩食後机の上整理。

船は馬來半島に沿うて航して居る。風が右舷に強い。左舷にはスマトラ島が遠く見えて居るがその方面に當つて稲光がする。

右舷には一處町らしい灯が見え、燈臺が二ケ所に明滅して居る。風があるけれどもマラツカ海峽の波は靜かである。甲板の籐椅子には西洋人ばかりが腰かけて居る。日本人は、多くライチング・ルームで手紙を書いて居る。

朝涼の四迷の墓に詣りけり

稲妻のするスマトラを左舷に見

彼南の稻田

三月六日。

朝また部屋を取り替へた。風當りは惡くつて暑い部屋ではあるが、ずつと廣くなるのでゆとりがあつてよい。

楠窓君の部屋で揮毫。

午飯後、海圖室に行つて新嘉坡の海圖を見せて貰ふ。

甲板に出て海豚の群り跳ぶのを見た。

右舷の陸地に何か燒いて居る煙が眞直に立ち昇つて居るのが見えた。是で見ると殆ど風は無いものと覺えた。

三時、右舷の陸地に當つてスコールの過ぎて行くのを遠望した。我船にも二三滴の雨を見た。

雷も時々鳴る。

スコールの爲に風の方向が變つて私達の部屋は急に暑くなつた。

電報數通を打つた。

四時、彼南に著く。

朝日ホテルの主人が新嘉坡の三菱から電報が來たと云うて迎ひに來て吳れた。

ランチに乘つたがなか〳〵に其ランチが動かなかつた。日本人の船客はブツ〳〵云つて居たが西洋人は皆默つて靜かに待つて居た。三十分位經つて漸く動き出したと思ふと五分位で波止場に著いた。

彼南の棧橋には印度人が澤山居て、物を賣つて居たり自動車を勸めたりした。一人で物賣の印度人が口に檳榔樹を嚙んで赤い唾を吐いて居た。私達は迎への自動車に乘ることになつたが、其自動車は幌であつて、其幌を取り除けて私達を乘せた。運轉手は馬來人らしかつた。

英吉利の城跡を見た。煉瓦造りの城壁があつた。是は英國が此地を征服した當時の城だと云ふ事である。其前の濠は埋めて往來になつて居た。

向ふの椰子の生えて居る島を指して、獨逸のエムデンが露艦を擊沈したのは彼處だと云つた。

市役所の前を通り、支那人の豪壯な住宅地の前をも過ぎ、それに引かへ日本人の貧弱な住宅地の前をも過ぎた。日本人會の會館だと云ふ小さい建物をも見た。

人力車は皆黑地に蒔繪のしてあるもの許りであつた。それが目立つたのは、新嘉坡では皆赤地に蒔繪のした車許りであつたからである。賑やかな町も通つた。

朝日ホテルの主人の話に、此彼南は二十萬人の中、十六萬が支那人、殘りの四萬が他の人種であつて日本人は僅に二百十五人であるとのことである。

雀が一羽飛んで居るのが目に止つた。燕は澤山に飛んで居る。

路傍に西瓜を賣つて居るのが目に附いた。

田舍道に出た。椰子が澤山ある。道傍に大きな木があるのは何と云ふ木かと聞くと、イースターン・ツリーだと答へた。馬來人や支那人の家がぽつ〳〵ある。

稻田があつて稻の匂ひがして來るのに逢著した。その稻は刈つてあるのもあり刈らぬのもあつた。刈つてある稻は根本からではなく中刈りにしてあつた。溝川の流れて居るさま、溝川の傍に雜草が生えて居るさま、笈が一つその溝川に漬けてあるさま、總て日本の田舍と酷似して居つた。又田植もするさうで、其に鳴子も引くとの話であつた。が、其稻田の直ぐ傍にアダツプの作

つてあるのは日本では見られぬ景色であつた。そのアダツプと云ふのは、前に新嘉坡の所では、椰子で葺いた屋根の家を云ふやうに聞いて居たが、その葺く材料になる椰子をアダツプと云ふのであると云ふ事がこゝで分つた。普通の椰子の葉と變らぬのであるが、殆ど幹がなく地面から葉の出て居る椰子である。普通の椰子の葉で屋根を葺くと直ぐ腐つて仕舞ふのであるが、このアダツプに限つて永持ちがするさうな。この種類のものは屋根を葺く材料を得る爲に栽培して居るとの事であつた。

蛇寺に行つた。蛇寺と云ふのは大變旅行者の間に名高いが、小さいつまらぬ寺であつた。青い蛇が祭壇の左右の臺の上にとぐろを卷いて乘つかつて居たり、楣間や扁額の上を這つて居たりするのであつて、其蛇は頭の三角な毒蛇らしい恰好をして居るが、それで居て少しも人に害を與へない。一人の西洋婦人の手に馬來人が一つの蛇を取つて渡すと、其婦人は平氣で寫眞を撮らして居た。章子も石段の下の處で寫眞を撮つたりして居たが、蛇が氣味が惡いと云つて外に出てしまつた。

車を返した。さきの稻田のある處と、子供が遊んで居る馬來人の家の前で寫眞を撮つた。

遲羅のお寺と云ふ前を通つた。遲羅では、男は結婚する前に必ず一度は坊主になつて佛に仕へ

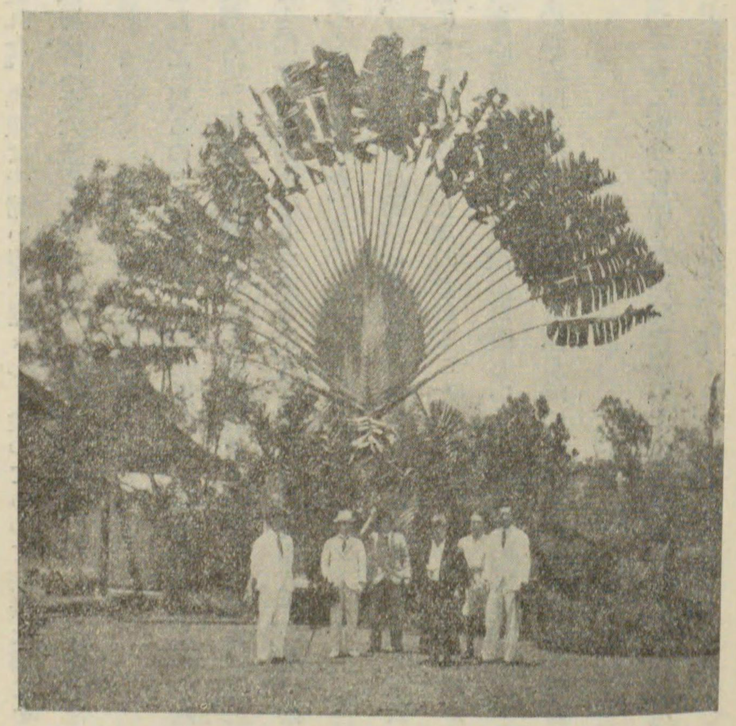
ねばならぬ習はしがあるので、此寺にもさういふ坊さんが澤山居るとの事であつた。序に暹羅人は四百人許り此地に居るとの事であつた。

果物の王と云はれるドリアンの樹、果物の女王と云はれるマンゴスチーンの樹、またマンゴの樹等の栽培してある前を通つた。

福建人の墓場と云ふ廣大な墓地のあるのを見た。廣東人の墓場は又別にあるさうだ。その廣大な墓場に澤山並んで居る墓標を見て、朝日ホテルの主人は、こんなに大きい犧牲を拂つて今日の支那人の土臺を作り上げて居るのです、日本人の墓場などは小つぽけな小數の墓がある許りですと云つた。

支那の寺の極樂寺に行つた。門前に茶店らしいものが三四軒あつた。その前に川があつて橋がある。その橋を渡ると石段が澤山あつて、その石段を上つて行くと美しい聲をして鳴いて居るものがある。蟬の種類で夕方になると鳴くと云つた。さう聞くとたしかに日本の蜩に類したものであるが、蜩よりも、もつと鉦の音に近いやうであつた。見上げると月が堂塔の上に懸つて居た。章子が夕暮の光線でどうか知らんと危ぶみながら寫眞を二三枚撮つた。龜の池に、賣つてをる草をはふつて遣ると、龜はスローモーションで群り食ふのであつた。もう閉つて居た本殿の扉を開

新嘉坡公園椰子の下にて



けて電氣を灯して佛像を見せて呉れた。佛像は皆赭い漆で毒々しく塗つてあつて莊嚴な感じをそぐものがあつたが、その中の十八羅漢（十六羅漢でなくて十八羅漢であつた）の如きは立派な作品であるとの事であつた。

此寺には女人は一切居らぬ事になつて居るので、戒律は相當に嚴重なものであるらしかつた。宗旨は禪宗である。坊さんは皆支那人で、臺灣人の僧侶も一人來て居るとの事であつた。

茗荷や瓜などを擔つた人が續々と門前の山路を下りて來るのに出會つた。その人々の顏や擔つて下りて來る樣子などは日本人そつくりであつた。

先刻素晴らしい雨が降つたので、其爲、今日は特別に涼しいのですと朝日ホテルの主人が云つた。先刻船で見たスコールが此邊にも豪雨を降らしたのであることが分つた。此門前の川水が赤く濁つて居るのも雨が降つた爲であるさうで、平常は澄んだ美しい水であるとの事であつた。

灯をともした小さい電車が椰子の林の間を通つて居るのも涼し氣に見えた。中には一人の老婆が乘つたのみの電車もあつた。

植物園に這入つた。もう暗くなつてゐて充分に見えなかつたので一通り一巡してそこを出た。唯いろ〳〵の香木の匂ひがして、月が木立のかげに出てをつた。

交通巡査の立つて居る灯のともつた明るい町に戻つて來た。レーン・ツリーの並木の道を通つて繁華な支那人の店舗の並んで居る通りに出て、支那人の眼鏡屋で章子の甲板日除けの色眼鏡を買つた。其間町の中央に自動車を止めて、私達はその自動車の中にあつてあたりを見て居た。客待ちの車は皆町の中央に止つて居るのが此邊の極まりであるらしい。支那人の店先の印度人が手招きをして居るのは道の向ふ側に居る印度人を呼ぶのであつた。それ等の印度人はのろのろと支那人の店先をうろついて居た。

それから戰捷記念道路と呼ばれてゐる、青白い電燈の連り點つて居る海岸通をドライヴした。そこには屋臺店が出て居つて、その屋臺店の前には支那人や馬來人や印度人が立ち止まり、海岸に出來て居る低いコンクリートの障壁の上には腰を掛けて涼んで居る人も多かつた。

八時のランチで船に歸つた。晩食が遲れて八時半頃になつた。食後、章子が兩替して居る弗が少し許り殘つて居たので、船に來て居る印度人から繪葉書を買つた。もう印度人に取り卷かれて居ても餘り怖くないと章子は言つた。また實際印度人たちは從順なやうに見えた。

十時過ぎ草臥れて寢臺に倒れるやうに寢た。

魔の海ベンガル灣

三月七日。

昨夜五十分時計を遲らしたとの事。

食後晝寢した。目が覺めると直ぐに晝飯。

出發前に貰つた岩波文庫を整理した。

甲板に出て居ると、左舷の海に波に沈んで流れて行くものがあつた。他の人々は皆人間の死骸ではなからうか、犬の死骸であらう、いや確かに人間の死骸である、などと打ち騷ぐのであつたが、私は椰子の木の株か何かであらうと大して氣に止めなかつた。

一羽の小鳥が舷側を飛ぶのを見た。雀に似て尾の長い鳥であつた。舳の帆索に止つて居たが暫して艙の方に飛んで行つた。艙の方に行つて見るとそこの通風筒の鐵の梯子に止つて居た。その

下には天幕が張られて居て、その天幕の下には印度人の甲板船客（デツキ・パツセンジヤー）の一隊が五十人許り居るとの事であつた。これは彼南から乘つたので、このデツキ・パツセンヂヤーは彼南に奉職して居る小學校の敎師とか官吏とかの知識階級の者が國へ歸るのであるさうな。甲板で煮炊きをして甲板に寢るのであるが、それは貧乏だからさうするのではなく、中には相當の金持もあるのであるが唯習慣になつて居るものだとの事である。

機關長室に行き口授筆記。

晩食後また甲板に出る。今日は馬鹿に暑い。寒暖計八十九度。夕燒がして暑さうな月が上つて居た。

左手に燈臺の光が見える。それはスマトラの最北端であるらしい。稻妻もまた走る。

スマトラを離れるといよ〳〵ベンガル灣にかゝつた譯で、彼南からコロンボに向つて直航してゐるので、ベンガル灣と云つてもよし又印度洋と云つてもいゝわけであるが、大海に出たので少し許りうねりが始つて來た。

十時半まで甲板に涼んで居たが、少しの風も無く、あるかと思ふと暑い風で寢る氣がしない。仕方なしに寢る。

夜中に手水に起きた時見ると稲妻が左舷に當つてして居た。

この日丁度横濱を發つてから二十一日目になる。是からマルセーユに行くまで、まだ二十一日である。航路の半ばを來たことになる。

三月八日。

また三十分時計が遲れた。

朝甲板に出ると、昨日見た小鳥がまた舳から艫の方に飛び移るのが見えた。雀に似て嘴長く、尾長く、寄せ木細工に似た鳥であつて、この船に迷うて來た鳥か若くはデツキ・パツセンヂヤーが飼つて居る鳥か。

このベンガル灣を、魔の海と船員が云つて居るさうである。それは二葉亭四迷が亡くなつたのもこのベンガル灣航行中だし、最近ではデヴイスカツプの佐藤選手が投身したのも此附近のマラツカ海峽のことであつたし、一體に此邊を航行して居る時分に病身の人は病氣が重くなつたり、神經衰弱の人は投身したり、事故が多く出るとの事である。現にこの船の司廚長は狹心症が惡くなつて、コロンボから引きかへさうかと云つてゐるさうである。これがベンガル灣を過ぎて古倫

母に著くか、若くは反對に來た時分にはマラツカ海峽を過ぎて新嘉坡に著くかすると、先づ無事であつたと喜んで祝盃を擧げる人もあるとの事である。朝食の時分に、この事が一しきり話題になつた。横光君が昨夜二時頃暑くて眠れぬまゝに甲板を歩いたが、誰も居らず、見ると船の動く方向に雲が動いて居て一寸海と云ふ感じが無くなるやうな心持がした、こんな處から錯覺が起つて海に入る人も出て來るのであらうかと云つた。

昨日の續き、口授筆記。

章子がよく眠つて居るのを起して晝食。

食後右舷の甲板に立つて唯漠々たる雲と海とを見てゐたが、左に遠く印度の大陸を想像し、右にビルマ、シヤム、馬來半島を描き、民族興亡のあとを思うて暫く默想に耽つた。

岩波文庫の岡倉覺三の「茶の本」と云ふ書物を讀み始めたが半ばに至らずして眠くなる。本を措いてまた機關長室に行き口授筆記。

食後、映畫があるので艦の甲板に行く。西洋人も日本人も皆椅子に腰かけて見てゐる。月が出て居るので、甲板の上で月にさらされた其映畫はまた風が吹く度にゆれる。コロンボの景色と他に亞米利加映畫があつた。

十時前寢。

三月九日。

時計また三十分遲れる。

朝食後浮袋を著ける。ボートの操練、章子寫眞を撮る。

文章を直す。

楠窓君の室に行き口授筆記。「四迷の碑」（大阪朝日）。

午後また口授筆記。「寄せ木細工のやうな小鳥」（まはぎ）。「乞食が無い」（中央公論）。

第三回句會。十人。四時からヴェランダにて。

夕食後また筆記。「プラチナ・ブロンドの夫人」（玉藻）。

そこへ一等運轉士が、星座の圖を持つて來て說明して吳れる。それから甲板に出て南十字星等を見る。

章子下にて女連と話して居り、十一時室に歸る。

コロンボの夕燒

三月十日。

朝食後また口授筆記。「熱帶季題小論」（大阪每日）。「スピカですか」（欅）。

晝食後文章を直す。

早くも錫蘭島が見えて來て船が其島に沿ひ艇を轉じた爲、今まで風向の惡かつた船室內に、俄かに風が吹込んで來て大變に涼しかつた。程なく古倫母の港が見えて來る。大體、彼南の港を望んだ時と大差がなかつたが、どちらかと云へば彼南の時は左舷に椰子の林の生えて居る島を併せ望んだので景色がよかつたが、其時よりも少し劣るか。午後三時半頃港に船が這入つた。

CEYLON FOR GOOD TEA

と云ふ、夜になればネオンサインの點る、大きな廣告が海岸に立つて居た。セイロン茶は、世界

の紅茶市場を壓倒して居るもので、またリプトン・テーとも稱へられて居る。リプトンと云ふのは其經營者の名前である。

棧橋が見えて居て、其上に稅關の建物があり、續いて五階建の洋館が見えるのは、アメリカの寶石商の店であつて、其右手にコンモリと木が茂つて居るのは、このセイロンの總督官邸の庭の一部が見えて居るのであると事務長が話した。

時間の都合が惡いので、このコロンボの名所になつてゐて、船客の必ず行くことになつてゐるキヤンデイの寺院に出掛ける人は一人も無かつた。往復七時間を自動車に乘るのださうだから、私はたとひ時間の都合がよくつても行く氣は無かつたのである。

暫く待つて居ると、旅券の檢査がスモーキング・ルームで始まつた。やゝ老いた英人が帳簿を擴げて居るが、まご〳〵して居る許りでなか〳〵日本人の名前は見付からない。船客が皆自分の名前を搜し出してそこを指すと、鉛筆で印を付けて碌々顏を見るでもなく旅券に印を捺して呉れるのであるが、それがなか〳〵時間を取つて、人の後ろにおとなしく控へて居るものには容易に順番が廻つて來ない。一人の船員が見兼ねて、「ミスター・タカハマ・キヨシ」「ミス・タカハマ・ゾキコ」と名前を指して呉れたので漸く濟む。私達が檢査を受けるテーブルは、此港を通過する旅

客許りであつたが、片方のテーブルは印度に入國する人々を檢査するのであつた。そこにはやゝ若い檢査官が、印度人を隨へて控へて居た。二三の英人の檢査が終るとデツキ・パツセンヂヤーの印度人がどか〳〵と這入つて來る。自分の生れた國に入るのに嚴重な檢査を受けて、まご〳〵して居る男女があるのを可哀さうに思つた。

大分旅券檢査で時間を費して、五時ランチに乘る。そのランチは一旦出かゝつて居たのであるが、先きの檢査官が乘ることになつたので、また元に戻して乘せ、直ぐに棧橋の方に行かず迂回して、Kobenhavn と國籍の誌してあつたMeonia と云ふ船のほとりまで行つた。そこで先きの年の若い方の檢査官が、一人別のランチに乘り移つた、其態度が颯爽としてゐて少し氣障であつた。その後にカバンを持つた印度人が乘る。そのランチはMeonia の方へ驀らに進んで行つた。我がランチは棧橋の方に向つた。

立派な二階造の長い棧橋であつた。印度人の水兵がその邊をうろついて居た。

これより前、南部と云ふ、邦人でこの地の食料品納入商をやつて居る人が楠窓君の部屋に來て居つたが、それが、店に大きな日本の國旗を出して居る印度人の店に導いてくれた。それはハシムと云ふ寶石商であつて、英語も日本語も話す氣の利いた印度人であつた。それに自動車を雇つ

て貰つて乘つた。例の通り楠窓君と私等二人。

先づ始めには田舍の方に行つて見ようと云ふことになつた。苞を乘せたやうな牛車が通る。アカシヤの花が黄色い花を附けて地上にも散り敷いて居る。他に白い花が咲いて居る木があるが、それはテムプル・フラワーであると運轉手の印度人が云つて、わざ〳〵其花を採つて來てくれた。稻田があり、蓮池がある。爪を揚げて居る子供も見える。

キヤラニ・リバーと云ふ河を渡り、そこに架る橋は、ヴイクトリア・ブリツヂであると運轉手は云つた。これはキヤンデーに行く道だとの事であつた。

一本の菩提樹(Bow Tree)があつて、注連のやうなものが引き廻してあつた。また水田があるかと思ふと、椰子の林がある。Jack Fruit と云つて、木の幹から、直ぐぶら下つて、大きな果物の生つて居るのがあつた。ふと見ると焚火をして居るのがあつた。雨が降り出したのでもう好い加減に車を返すことにした。

カソリツクの寺があるのが遠望された。澤山の印度烏が、椰子の森に夕暮の塒を尋ねて歸つて行くのが見えた。

リプトンの茶の會社の傍を横切つた。モハメット寺院もあつた。ヴイクトリア・ガーデンと云

ふのもあつた。競馬場もあつた。巡査の教習所と云ふのもあつた。芝の敷いてある美しいグランドに、白いシヤツを著た印度人の青年達がバスケツトボールを遣つてゐるのもあつた。

或る寺院に連れて行かれた。それは私等の志したやうな古い寺院ではなくて、極めて新しい安つぽい寺院であつた。私達に履物を脱げと番人らしい印度人が云つた。少し躊躇したが、まあ云ふなりになつて靴や草履を脱いで番人の後に從つた。正面には、セメントで作つたと云ふセルロイド細工のやうな大きな釋迦の像があつて、その左右にもまた大きな釋迦の像が突立つて居た。番人が先づ手を高く合せて正面の釋迦の像を拜むので、仕方がなしに私達も頭を下げた。それから厚い唇に白い齒を剝き出して英語で說明して呉れるのであつたが、どうやらそれは同じ釋迦ではあるが、その悟りの程度に相違があるものゝやうに聞き取れた。傍に一人の印度人の女が前に布を敷いて其上に頭をすりつけて長く〳〵禮拜してゐるのがあつた。それから左の方の步廊に大きな涅槃像が横はつて居つた。その像の前に、散華してあつたテムプル・フラワーを取つて、嗅いで見よと云つて渡した。それからぐる〳〵步廊を廻ると、そこに釋迦一代記の見せ物を見るやうな感じで、摩耶夫人が、無憂樹に片手をかけると、釋迦の生れ落ちた處とか、悉達太子時代に無情を感じて迦毘羅城を脱け出る處とか、佛弟子の阿難が迦葉等と一緒に釋迦の前で法話を聽い

て居る處とか、さう云ふものが十餘りもあつた。さて表に出る段になると金を請求した。見ると章子に靴を履かせて居る一人の男があつた。また楠窓君のも靴の紐を態々ほどいて待つて居た。靴を履かして又金を請求するのであることが分つた。こんな俗惡なものを作つて、それで旅人から金を取ることを計畫して居るのだと思ふと腹も立つたが、また可笑しくもあつた。

自動車に乘る時分には雨が大分降つて居た。雨中の道を歩いて居る裸の男や、また衣服を纏うて乳の上を嚴重に縛つて居る女が多く見られた。或る一つの家に西洋婦人が表を見て居るのが目に著いた。カンナの咲いて居る家が澤山あつた。

雨が降つて居るに拘らず大變な夕燒がして來た。天地が明るくなつて、道行く人の姿も浮きやかに、草木の色も青さを增した。西の空を見ると黃金色の雲が重疊と重なつて、その中には佛陀でも居るもの丶樣に莊嚴であつた。

やがて Good Road と云ふ海岸に沿うた遊歩道路に出た。その前には大きな芝生があつた。夕燒の空はまのあたり海の面に擴がつて居て、光りは先きほどよりやゝ衰へて見えたが、澄んだ靜寂の空に黃金を展べたやうな雲のたゝずまひを見ることは、とても內地の夕燒などの比ではなくて、全く佛陀の國で始めて見ることを得る美麗莊嚴な景色であると思はれた。ホテルがあつ

ジョホールにて——章子と著飾つた馬來人の子供たち

た。議事堂があつた。郵便局があつた。政廳もあつた。トーマス・クック會社もあつた。

それからハシムの店に歸つた。ランチは何時出るのか店の人に聞いてもらつた處が八時に出るのだとの事で、まだ一時間ばかり待たねばならなかつた。その間にダイヤとかルビーとかオパールとか云ふ寶石類を見せて頻りに買へ〳〵と勸めた。

八時に棧橋に行つて見ると、まだランチはゐない。唯土人の水兵がうろ〳〵してゐる許りだ。八時を過ぎた時分にやうやうランチは來た。それから出て來た人の中に我船の司厨長がゐた。これは先日來病氣であつたので遂にこゝから白山丸に乘つて內地に引きかへすのであつた。心臟狹窄症であるらしい。顏がすこしむくんでゐるやうに月明りに見えた。其ランチは來たは來たが九時でなければ出ぬとの事で、最前から印度人がやかましく勸めてゐたボートに乘つた、一人前日本金五十錢との契約で。この印度人は片言交りの日本語を話して、以前郵船の北野丸で日本に行つたことがある、神戸、大阪、横濱は知つて居る、東京は知らないなどと云つて居た。船に著いてから先きの契約は忘れたやうな顏をして、一人前印度金の五十錢だと云つて無理に請求した。勿論與へなかつた。」

八時半食事。

岡倉覺三著「茶の本」を少し讀む。曩に整理した岩波文庫は岩波茂雄君から寄贈されたもので、旅中の徒然に讀んで見ようと思つて先づ讀むべきものを分つて置いたのである。この「茶の本」も其一冊である。眠くなる。十時前寢る。

アカシヤの落花を踏んでインデアン
夕燒の雲の中にも佛陀あり

三月十一日。

昨日の短文原稿六通と、渡佛日記と、葉書十數通等を楠窓君に賴んだ。是は數日後入港の白山丸の機關長に托して日本で投函して貰ふ爲であつた。

甲板に出て見る。水夫が高くマストの上に登つて何か仕事をして居る。

金色の鷗かと思つたが、それは鳶であつた。澤山の印度烏と一緒に飛んで居つたのが、仕舞ひには烏二羽に追はれて遠方の波上まで飛んで行つた。

印度人がボートを漕いで波の上に漂うて居る。其は船から投げた塵芥の中に、何か拾うやうなものはなからうかと漁つて居るのである。一度拾ひ上げた蜜柑を直ぐまた投げ捨てる。

船の眞下に釣りをして居る印度人があつた。見るとパン屑を澤山足元に貯へて居つた。

南部君が來たので二三の事を聞いて見た。

稻は年二回收穫ださうだ。バラ蒔きで田植をすることは未だ知らないらしい。政府の許しがありさへすれば、今年あたり農學校の生徒達が日本に渡つて、稻作の事を習はうと云ふ計畫もあるさうだ。

佛敎は盛んである。僧侶は托鉢して、何でも貰つたものを鐵鉢の中に入れて、それを一日に一回午前中に食つてそれより他はもう食はないさうだ。寺で火で焚くことは一切許されぬと云ふ事である。日本の僧がたま〳〵來て、こちらの僧侶の中に混つて修行した事があつたが、とても永くは勤まらなかつたさうである。土人が皆、僧侶の鐵鉢の中にさま〴〵の物を喜捨して恭々しくその僧侶を禮拜する。僧侶の著て居る衣に黃色いのと褐色のとがあるが、それは信者たちが呉れるまゝに著るのであつて、別に位に差異があると云ふ譯ではないさうだ。

佛敎の他に、南印度方面にはヒンヅー敎が盛であるし、また回敎も盛であるとの事である。この錫蘭には少數の回敎があり、また知識階級にはカソリックも行はれて居るが、先づ全島佛敎が盛だとの事である。

どちらかと云へば煙草は好きな方であるが、お茶を飲んだ時分にその後で吸ふのが多い。往來を通つて見て、あまり煙草を吸つて居るのに出會はさないのは其爲である。葉卷は大變安く、印度煙草もまた安いのであるが、西洋煙草は大變に高く、一本買ひをして、それを吸ふのであるさうな。

南部君が歸ると間もなく十二時で出帆の銅鑼が鳴つたが、丁度其時リヴアプールの汽船が一艘我が船の前に横はり、其爲艇を轉ずるのに骨が折れ、十分許り遲れた。港を出る時水先案内が下りた處に、パイロツト・ステーションと書してある建物があつた。その窓から釣りを垂れて居るのが見えた。

晝食が濟んで甲板に出て見ると、錫蘭の島が遙に霞んで居た。一番高いアダムス・ピークと稱へる峯には、昨日寺で見たところの釋迦の像の中にあつた釋迦の足痕のある岩があるとの事であつた。

これから一週間のあひだ島も陸も見えず、唯水天の間を航するのであつて、唯明日の夕刻ミニコイと稱する珊瑚島と、それからまた、アデンに著く前日位岩礁の峙つて居るソコトラ島を見る許りとの事であつた。

古倫母に黄金色なる蔦が居た
帆柱にペンキ塗るなり印度洋

船室に歸つて、「茶の本」を讀み終る。續いて「ヘルマンとドロテア」を讀み終る。

今日もまた日は海に入る印度洋

晩食後楠窓君が、横光君と私等二人をスモーキング・ルームに連れて行つて、魔の海ベンガル灣を無事に通過したから祝盃を擧げようと云つて葡萄酒の盃を擧げた。

海豚出て踊つて見せつつ印度洋

十一時まで甲板で涼んで居つた。部屋に歸ると、章子は十時に歸つて來たとの事で直ぐ寢る。

印度洋航行、ソマリランドの一角を見る

三月十二日。

四十分時計が遲れる。

朝甲板に出て見る。水平線の處に一抹の煙が見えて居る。

獨逸人ヤーコブ作の「ヂヤツクリーズと日本人」と云ふのを讀む。

また甲板に出る。水夫達がデリツクやブロツクを磨いて、新しくペンキで塗つて居る。折節船長が來たので、暫くそれを見ながら話す。

部屋に歸つて「ヂヤツクリーズと日本人」を讀み了る。

舷側の波に虹を見る。

楠窓君の室にて口授筆記。

五時甲板に出て見ると、船はミニコイの珊瑚島を通過したところであつて、後方にそれを遠望した。其島の中に立つてゐる白い燈臺も見えた。

晩食後甲板にて映畫。長良川の鵜飼だけを見て退室。シユニツレルの「みれん」を讀む。

十時、甲板に出て章子と共に三十分許り涼み、寢。

三月十三日。

また三十分遲れる。

今日から、日本食事を特に用意して置いてもらふことを辭退する。脚の多少むくむのが脚氣の氣味があるのかも知れぬから、少し米食を控へて見ようかと思ひたつたのである。然しこれは試みである。

朝食後直ぐ眠くなりて寢る。

「みれん」を讀む。

午食、また眠くなりて寢る。

「みれん」を讀了。「卽興詩人」に移る。

口授筆記。

楠窓君に貰つた、後藤朝太郎著の「支那の田舍めぐり」を讀む。

一時過ぎから第四回俳句會。機關長室にて。

甲板に立つと風が涼しい。

十時半寢る。

三月十四日。

二十五分また遲れる。

古倫母より坡西土まで、眞水を汲みとる所は無いとの事で、今朝よりは湯をかゝるのみとなつた。

「卽興詩人」を讀む。

朝食後甲板に立つ。火夫達がウキンチを直して居る。二等機關士も親しくハンマーを持つて働いて居る。折節一等機關士が來て、傍に立つて居たが、マストの横木に登つて、ロープを取り換へて居る水夫達を仰ぎ見て、私達には危かしくてあゝ云ふ事は出來ませんと笑ふ。また、嘗て讀んだ秋山眞之傳に、私の文章が載つて居つたといふ事から、秋山眞之の話をした。海水溫度が今朝は八十二度とのこと。

「卽興詩人」を讀む。

四時から口授筆記。歐米旅程の相談をして六時になつた。

今日は七時から、甲板で神戸肉の鋤燒があつた。段だら幕を張つて、鋤燒のチヤブ臺を圍み、西洋人も日本人も胡坐をかいて食つた。西洋人は、あぶなつかしく箸を持つのもあり、またフオ

ークを持つのもあつた。船長から日本酒が出た。章子は初めて支那服を著た。船員が寫眞を澤山撮つた。

それからめい〳〵假裝帽子を被り、艙に並列してまた寫眞を撮り、ダンス、東京音頭等が始つた。船員が女に假裝して東京音頭を踊つた。

九時、部屋に歸つて「卽興詩人」を讀む。

十時、例により甲板に出で、少し風に吹かれて寢る。」

三月十五日。

時計が二十分遲れる。

昨晩章子は充分に眠れなかつた模樣であつた。私は煽風機をかけずに眠つた。氣温は八十三度。少し風があつて、滿目白馬の驅けるを見る。

朝食後直ぐ睡眠。

腹が少し惡い。オートミールが適さない爲か、若しくばオートミールと卵とを併せ用ゐたが爲か。數日前に、矢張りオートミールと卵とを併せ用ゐた時に腹が惡かつた事を覺えて居る。牛乳

と卵とを併せ用ゐる事がいけないのだらうかと思ふ。

昨夜、酒を過した爲に、今朝は頭の痛む人が多いとの事を聞いた。

「卽興詩人」下卷に移る。

晝食後また少しく眠る。章子も眠る。

北風が强く吹いて船が動搖する。船の動搖は暫く振りである。

口授筆記。終つて歐米旅程、ほゞ決定。

夕食に章子は出なかつた。見渡すと食堂には日本婦人はもとより、西洋の婦人にも缺げて居るものが多かつた。船の動搖は不規則で心持が惡い。

甲板に出て見た。風が强くて久しくは立つて居られなかつた。舷側に碎ける波が空に揚つて甲板に飛沫を上げて居るのを見た。

九時半眠る。

三月十六日。

又二十分遲れる。波がやゝ靜まつて居る。

朝飯に章子も出た。食卓にニュースを配つて來たが、その端に今日は左舷に阿弗利加の伊太利領のソマリランドの東北端、ガーダフイー岬が見える由が書かれてあつた。ソコトラ島は昨夜半に通過したとの事を楠窓君が話した。

章子がソーフアに横になり、私が卽興詩人を讀んで居る中に、章子は、見え始めたのではありませんか、それらしい樣子ですよと注意したので甲板に出て見ると、見えて居る見えて居る。左舷に當つて魚の膽のやうな陸地が見えて居つた。尙よく見ると、其向ふの方には薄黑い山脈が横はつて居つて、其左端は斷崖となつて海に突き入つて居るやうである。初めて阿弗利加の大陸と云ふものに接したのである。章子も誘ひ出して尙よく見た。船の進むに從つてだん〳〵とその魚の膽のやうな陸地が近づいて來る。魚の膽のやうだと云ふことを章子に話すと、成るほどかはぎの膽のやうだと云つた。さうだ、かはぎの膽のやうな陸地である。岩角が崩れて海に落ち込んで居るのは薄黑い色を爲して、其上を覆うて居る砂は赤つ茶けた白い砂である。この砂は砂漠の砂である。一草一木も無く、唯處々に點々とあるのは何であらうかと思つたが、後で楠窓君に聞くと、それは砂漠に限つて生ずる苔の一種であらうとの事であつた。白い雲が其砂漠の上を這うて居た。

ジヨホール回々教の寺院にて——橫光利一と盧子

十時、浮袋を著ける。

なほ近づくまゝに見て居ると岩の上に燈臺が立つて居るのが見えた。よくあんな處に燈臺を守る人があるものだと思つた。折節傍に立つて居つた一等機關士が、第一に水に困りはしないかとつぶやいた。章子が寫眞を撮つた。

「卽興詩人」下卷を讀み了る。この卽興詩人は、昔私が目ざまし草に多少關係して居た時分に、尙續載されて居たもので、それが二冊の書物に纏められた時分に親しく鷗外漁史から贈られたもので、既に一度讀んだことがあるが、星霜三十年、多くは忘れ去つて今新しく讀む心地がした。若し旅程に餘日があつて、伊太利に遊ぶことが出來たら、誠に好伴侶になる書物であつて、ローマ、ナポリ、ベニス等の名勝が、この書物によつて掌を指すが如く明瞭であるばかりか、それ等の土地に人情を織り込み、情趣の豐かなるものがあつた。

甲板に出ると尙ソマリランドの續きがあつた。一艘の大船がこなたに來たるのに出會つた。

鷗が船の廻りを飛んで居つた。古倫母を出てから久しく鷗を見なかつたが、ソマリランドの陸地を見るやうになつてから出會ふやうになつた。赤い藻が波に浮んで居るのも見た。よその船を見たり、鷗を見たり、海草を見たりするので、奇怪なアフリカの陸地ではあるけれども、陸地近

くなつた心持がして何となく賑かであつた。

鷗の羽の上部は薄い褐色であつてソマリランドの岩のやうな色をしてをつた。

午後三時、章子は尙よく眠りつゞけて居る。

四時、口授筆記。

晩食後、船橋に上つて楠窓君指導の下に星座表に照らして星を見た。主として南極に近い星を見るが爲であつた。日本や歐羅巴では見ることの出來ない星座を見たのであつた。十一時頃まで起きて居て、ケンタウルスの一等星、α（アルファー）β（ビーター）の上るのを見た。

十一時半頃寢に就く。

三月十七日。

亞典上陸、アラブあはれ

十五分遲れる。

昨夜は、夜が更けた爲に充分に眠れなかつた。朝食後直ぐまた眠つた。

眠りが覺めて甲板に出て見ると、舳の方に當つてお伽噺で見るやうな岩山が、茶褐色の色をして現れて居るのを見た。矢張り一草一木も無く、唯峨々たる岩が聳え立つて居る許りであつた。近づくに從つて其岩の上に點々と家屋のあるのが見えた。全く知らぬ國に來たと云ふ、奇怪な山の感じであつた。是が亞典の町のある處であつた。

鷗がしきりに船の廻りを飛んで居た。翌の上の黑いのと赭いのと兩方があつた。

折節、長谷部少將の話に、其岩山はもと噴火山であつて、また向うの方に見える同じ樣な岩山も矢張り噴火山の跡であると云ふことであつた。尙近づくまゝに見えて來たのは、その遠い噴火山と此方の近い噴火山が續いて居る一帶の海岸の上に、白い物が並んでゐるのは何であらうかと訝しく思つたが、それは鹽の山であつて、此邊は雨がちつとも降らない爲に、天然の日射によつて鹽が採れるのであるとの事であつた。日本のやうな、此頃は工業に鹽を要することが非常に多いのであるが、四面を海で環らして居る國でありながら、それで鹽が足らないと云ふのは雨が多い爲であるさうだ。

飛行機が二臺著水したかと思ふとまた飛ぶのが見えた。三井物產の船が一艘かゝつて居り、他には數艘の外國汽船がかゝつて居つた。

私達は亞典には上陸すまいと昨晩話して居たのであるが、俄に上陸する事に變更した。

その中船は港內に繫留された。間もなく亞剌比亞人が澤山船に乘つて來た。澤山のボートやモーターボートが船側に漕ぎ寄せて來て居るのが見えた。それ等の澤山の船夫の中に、頭髮の縮れた皮膚の眞黑な人間が居た。それは阿弗利加のニグロであるとの事であつた。が、佛樣の頭の毛の縮れて居るのは、この頭を寫生したものであらうと思はれた。

甲板に立つて居る處に、ボーイが手紙を持つて來た。それは友次郎からの手紙であつて、二月の二十八日に巴里を出したものであるが、Par avion とあつたから飛行便でポートサイドに著いて、それがこゝに廻つて來て、我船の到著と同時に配達されたものであつた。

こゝでは旅券の檢査はなかつた。唯船の舷門に土人の巡査が立つて居た。

波が荒かつた。此邊には鱶が多いとボーイが云つた。二時、一行十五六人がモーターボートに乘つて波止場に著いた。この時初めて氣がついたのであるが英吉利の驅逐艦や水雷艇が投錨して居つた。

それから自動車に分乘、私の自動車には例によつて三人の他に、河野夫人が同乘した。運轉手は、ソマリランドのニグロであつた。ブロークンであつたが英語を話した。

亞典とは鬼棲む地かや上陸す
自動車の運轉手こそニグロなれ

港の一箇處に、木の植つて居る處があつたが、それは一日に一度水をやつて、僅に育てゝ居るものであるとの事であつた。その他は全く木と云ふものは無かつた。

歐洲人の墓場と云ふものがあつたのを見た。また亞剌比亞人の部落のあつたのも見た。

熱風が面をうつてむせかへるやうであつた。

海岸に鹽の山がある處に出た。その邊には澤山の風車があつて、その風車が海水を汲みあげ鹽田に潮を引いて居るのであつたが、その鹽田には强烈な日光に照らされて鹽が白く喰付いて居るのが見えた。

椰子もなき亞典の濱や鹽の山

駱駝を曳いて行くアラブを見た。是は繪でよく見るやうに、一人のアラビア人が駱駝に乘つて四五疋の駱駝を連れて悠々と行つて居るのもあり、また、荷車を駱駝に引かせて行つてゐるのも

あつた。

駱駝痩せ瘤も小さくあはれなり
反芻して駱駝下目を使ひをり

路傍に鐵管が引いてあつた。是は今から行くところのオアシスの水を引いて居るのである。

飛行場もあり、兵營もあつた。かと思ふと、またゴルフ場もあつた。ゴルフリンクと云つても唯砂漠の一部分を限つたやうな處で、グリーンの無いものであつた。

オートバイに乘つて居る英吉利の兵隊に出會つた。運轉手の話に、英吉利の兵隊は日に一度はこんな風に見廻るとの事であつた。また、アラビア、印度、英吉利の兵隊でこの土地を固めて居るが、エチオピアの戰爭が始つてから、英領ソマリランド國境守備の爲に、大分出征して居るとの事であつた。

五六哩も疾走した處に、椰子とか、楊の種類であらうか黃色い花の咲いて居る木などのある處に出たが、其木の勢は甚だ惡くて、矢張り灌漑して僅に生命を保つて居る木が多いやうに思はれた。其間にぽつ〳〵家もあつた。

段々木の茂つて居る處に達した。一つの門があつて、其門を入ると椰子やパパヤの木や前の楊

のやうな木や、針葉樹の種類と思はれる樹等が林を爲して、またブーゲンベリヤや、向日葵や葵や、千日草等の草花が作つてあつて、蝶々の飛んで居るのも見えた。一つの井戸があつたので下りて見た。覗いて見るとそれは全くポンプで汲み上げるやうになつて居る井戸であつた。二千尺か三千尺の深さから水を汲み上げるとのことであつた。かう云ふ井戸は此他にも尙あるのであらうが、然し、想像して居つた、泉があつて、椰子の木の蔭に人も駱駝も休んで居つて、其泉の水を掬んで飲むと云ふやうな、よく挿繪などで見たオアシスと云ふものとは感じが違つて居つた。其邊の林を爲して居る木にも尙水を灌いで居るものらしかつた。

オアシスに葵の園を作りなす
一本の椰子もたうとき泉地かな

暑くて堪へ難い心持がしたので、匆々に自動車に乘つた。アラブの子供が、手を出して金を吳れと云つた。

アラブの子手を出して金くれといふ

運轉手が笛を鳴らして車を停めたのは、前面を塞いで居る荷車が居る爲であつた。よく見るとそれは駱駝に水を呑まして居たのであるが、其時アラブの男が、聲を勵まして叱つたので、駱駝

の口をとつてゐた子供は引張つて傍に避けた。大人しく子供と一緒に道を避けた駱駝は、今まで水を呑んで居つた其盤から無情にも遠ざけられたのであつた。

それから引返してもと來た道を歸つた。鹽田の處に戻つて章子は寫眞を撮つた。殆ど港が近いと思はれる處から山手にかゝつた。自然の岩を刳り拔いたまゝの粗雜なトンネルを越えると、舊火口に入つたものであらう、岩山に取り圍まれた平地があつた。そこに印度人の兵營があり、土人の監獄があり、郵便局があり、モハメダンのモスクがあり、ローマンカソリツクのチヤーチがあり、アラビア人の部落があり、女學校があり、モハメットの學校があり、市民病院があり、マーケツトもあつた。

アラビア人の學生と云ふのが十人餘り、同じくアラビア人の教師に連れられて、その町を歩いて居るのに出會つた。顏を布で隱して居るアラビアの女にも出會つた。黑い布で頭を蔽うて居つて顏の處は赤い布や青い布でくるんで居るのを見るのは、見慣れない目には一寸氣味が惡かつた。

また前のやうなトンネルをくぐつたが、馬鹿に臭かつた。恐らく駱駝の小便の臭であらうと楠窓君が云つたが、さうらしかつた。駱駝は澤山、トンネルの中で私達の自動車を避けて居るのを見た。

やがてタンクのある場所に出た。そこには門があつて、四人分三志六片の見料を取つた。中に這入つて見ると、左右に木が植つて、その木の下を縫うて水が流れて居た。だん〳〵そこを登つて行くと、そこに大きな石で固めたタンクがあつて、その傍にしつらへてある高い懸け出しの上で、五六人のアラビア人が懸け聲をしながら、遙か下のタンクから水を汲み上げて流して居るのが見えた。その水が先きの樹木の下を流れて居る水であつた。見上げて見ると左右から岩山が迫つて居る。その谷間を二段三段に仕切つて、上のタンク中のタンク下のタンクと云ふやうな風に、水を溜めるものであるらしかつた。然し是は新しく出來たものでは無くて、紀元前六百年頃波斯人の築いたものであらうとの說がある。また其頃は樹木も繁茂して、多量の雨があり、氣候も濕和であつたと云ふことも想像されると云はれてをる。兎に角、大昔の進んだ工事を思はしめるに足るものである。是は今から百年前に、英國の軍人によつて發見されたものであるさうだ。今は僅に水を湛へて居るが、その水は多少ながら岩の虧隙からしみ出た水を湛へたり、若しくは極く少量の雨があるのを湛へたりしたものであらうか。劇しい日光に蒸發する分量も可成多いものであらうと思はれるのに、不思議にも水の湛へてあるのを見た。傍にそのタンクの來歷を書いた碑が建つてゐた。

一人のアラビア人が案内顏に先きに立つて行つて居つたが、其アラビア人を混へて一行の寫眞を章子が撮つた。自動車に乘る時分に、そのアラビア人が手を出して金を吳れと云つた。

錢　乞　ふ　も　し　う　ね　か　ら　ざ　る　ア　ラ　ブ　あ　は　れ

また、アラビア人の一つの部落の前に出たが、染物を前の大地に乾し擴げて居る處もあつた。其染物の赤や青の劇しい色が暑い日光を受けて反射して居た。駱駝が澤山起つたり坐つたりして居るのを見るかと思ふと、また自動車の溜りもあつた。山羊が軒下をうろついて居た。ふと見ると水をコツプに注いで往來の傍で賣つて居るのもあつた。私達の通る自動車道はよい道であつたがその他に道らしいものは殆ど無くて、部落でも家は不規則に建ち並んで居た。

歸り道に大變美しい山羊の一隊が歸つて來るのに出會つた。それはソマリランドから來た山羊だと運轉手は云つた。

波止場に歸つて休んだが、建物の中に居れば涼しかつた。英國人の官吏だらうと思はれる一人の老人が、澤山のアラビア人を相手に話したり笑つたりして居るのが目についた。

皮で拵へた草履のやうなものを履いて居るアラビア人が居つた。皮の切で拵へた原始的の鼻緒が、足の拇指と、他の四本の指との間に挾まつて居るのは、日本の草履の感じと同じであつた。

私が草履をはいて居るのを、不思議さうに土人は眺めて居たのであるが、この履物が矢張り草履と同じ理窟なのが可笑しかつた。

五時、船に歸る。

ボーイ、船客等甲板から釣りを垂れてをる。見ると小魚が船體から吐き出す水の所に群つて泳いでゐる。

六時出帆。晝間はたゞ暑くて、殺風景に見えた岩山も、今は涼し氣に聳え立つて居た。

六時十分日が海に入つた。間もなく少し夕燒がして、岩山も紫色に染つた。

晩食に、ボーイが最前釣つた魚の煮付が出た。鰺のやうな魚でおいしかつた。

アベ・ブレヴオ著「マノン・レスコオ」を讀む。

草臥れて九時半眠る。

夜中の一時に涙の瀨戸、卽ち、バベルマンデブ海峽を通過。昔亞剌比亞人が、涙の水盃をして印度に商賣に出向いたといふところである。

夜半四時小便に起きた序に、甲板に出て星を見た。蝎座が水平線上に現れて居るのがよく見えた。

蝎座が出て寢るとせん星涼み
船人の夜すがら寢ず星涼し
紅海に入りて星座のやゝ移り
面舵に舟傾きて星涼し

あとで聞くと、丁度其時間にモーカの沖を過ぎたとのこと。モーカは有名な珈琲の產地である。

紅海に入る

三月十八日。

十五分遲れる。

昨夜より船が少し搖れる。その代り風が部屋に這入つて大變に涼しい。

朝、甲板に出て見ると、船が一艘波を被つて進んで來るのが遠望される。殆ど舳や艫が水中に

沒するのであらうかと思はれる程であるが、だん〳〵我船に近よつて來て摺れ違うた。

左舷に島が見えた。

正午メツカの沖を通過。回々教徒は船上に其方を向つて默禱するさうである。鷗がしきりに飛んで居た。

突然汽笛が鳴つたので船室の窓から見ると、郵船會社の貨物船が行き違つて居るのが見えた。

晝飯後「マノン・レスコオ」讀了。

インクワイアリー・オフイスで貰つた「埃及見物」を讀了。

甲板に出る。右舷に島が見える。無人島らしいが燈臺がある。船長と暫く立話をした。

メリヤス作「カルメン」を讀む。

四時口授筆記、六時に至る。

晩食後風が變つてまた暑くなる。「カルメン」を讀む。

甲板に出る。舶は北極星よりやゝ西に振つて進みつゝある。北極星がだん〳〵高くなつて來た。

章子、森川夫人に、テーブル掛の編物を習ふ。

セナイ護謨園　椰子酒をのみつゝ小憩——章子、虚子、横光利一

十時半寢。

三月十九日。

此日また時計が十五分遲れた。

夜中から煽風器をかけた。また暑さが逆戻りしたのである。寒暖計八十五度。

鷗が尙しきりに船のあたりを飛んで居る。

揮毫少々。

「カルメン」讀了。

晝食後睡眠。

四時口授筆記。いろ〳〵講演の事を相談した上、楠窓君に其講演の草稿を整理執筆してもらふ事を賴む。

鋤燒會の時の寫眞が出來て來た。

アンドレ・ジードの「田園交響樂」を讀む。

晩食後「日本の四季」等の映畫を見る。

十時寢。

三月二十日。

今日も時計が十五分遲れる。

昨夜より大變涼しくなつた。氣溫七十八度。

十時楠窓君の部屋に至り、俳句講演の原稿が荒まし出來たものゝ朗讀を聞く。二三箇處訂正增補の點を相談する。

「田園交響樂」を讀み了る。

午食後眠る。

三時、汽笛が鳴つた。私が甲板に出て見た時はもう通過してしまつて居たが、榛名丸と行き違つたので、榛名丸の方では「御安航を祈る」と書いた大きな布を舷側にぶら下げて居り、乘客一同が歡呼の聲を擧げて居つたとの事であり、我船もまたメーンマストの帆索に吹流しの鯉を四五旒かゝげ、また舷側に「安全なる航海を祈る」と大書した布を下げ、旗を振つて同じく歡呼の聲を擧げたとの事である。

三時半、甲板にテーパーテーがあつた。幕を張り廻はし、噴水をしかけ、ボーイ等が揃ひの浴衣、襷がけで立働いて居る様子は鋤燒會の時と同様で、サンドウヰッチ、氷汁粉、蜜豆、和洋菓子等が出て、それに各々にメヌーを刷り込んだ扇子が一本づつ配られ、また寫眞を撮つた。それからダンスがまた始まるらしい様子であつたが、私は部屋に歸つた。

チンダル著「アルプスの旅より」を讀み始めた。

カルカツタ藤澤紀子、ボンベー濱崎化城兩君に手紙を出した。カルカツタ沖、ボンベー沖通過の際各電報を貰つた謝禮である。

五時、口授筆記。再び講演原稿の朗讀を聞いて、更に二三箇處訂正追加の事を相談した。

晩食後句會。出席十二人。此前投句しただけであつた栗田船長も出席。此他投句者三人。工藤氏、河野夫人、臨席傍聽。

十時半、寢。

カイロ行、ピラミッドに登る

三月二十一日。

十五分時計おくれる。氣溫七十四度。

朝六時、楠窓君に導かれて船橋に上り、シナイ山を見た。一等運轉士の小島君が、朝日が上つて遠近が充分にはつきりしない一帶の山脈を指して其中に突出してゐるシナイ山を指し示して呉れた。シナイ山はモーゼが神の十戒を石に刻んだ處である。

その邊りはアラビア側の陸地も近くなつて來て居るのであるが、それよりも尙、反對側のアフリカ側の陸地は餘程近くなつて來て、赭つ茶けた岩山は眞近く亙つて居るのであつて、亞細亞と阿弗利加の兩大陸が餘程接近して居ることを思はしめた。

アラビアにアフリカの山相迫る

アラビアの朝日を負ひてシナイ山

部屋に歸つて眠さうな章子を促がし立てゝ又甲板に出た。朝日がだん〳〵上つて、いよ〳〵山容が模糊として來たけれども、尙たしかにあれがシナイ山だと指し示すことが出來た。

寒くなつたので再び床の中にもぐり込んだ。だん〳〵熱帶を離れて來て、朝夕は時候といふものを取り戻して來たやうな心持がするのであつた。

章子が小さい鞄に寢卷や齒磨、楊枝などをつめ始めた。今日午後スエズに上陸してカイロに行くが爲である。

朝飯後、楠窓君の部屋に章子と共に出かけて行つて、英吉利貨幣の一ポンドが二十志、一志が十二片と云ふやうな面倒臭い勘定を敎はつて、五種の銀貨があることをも實際に就て敎はつた。今までは萬事楠窓君に任せてあり、又上陸してもたいして必要も無かつたのであるが、カイロには楠窓君は行かないのみならず、泊りがけの旅行であるから、先づ二ポンドだけ用意の爲に持つて出ることにした。最も總てのことは坡西土の南部に任してあつて、南部の店員が船まで案内に來て吳れる手はずになつて居て、勘定もあとから船に取りに來ることになつて居るのであるが、唯、小使やチップの用意の爲である。

口授筆記。晝寢。

三時、蘇士に著いた。

鷗が飛んで居たが色が全體に白かつた。唯羽の廻りが黑い許りであつた。

見渡して見ると、アラビアの方も砂漠であり、アフリカの方も砂漠であつて、アラビアの方はやゝ遠くに山が亙つてをり、アフリカの方は眞近に赭い色の山が亙つて居た。蘇士と云ふ處は其兩方が愈迫つてをるところに建つて居る町であつて、一寸見た處は家も澤山はなく僅に數十軒位であらうと思はれるのであるが、聞く處によると人口が二萬あつて、二千年來の古い都邑であつて、印度と歐羅巴との交通の要路に當つて居たのださうである。やゝ右手の少し木のある邊りが運河の入口であるらしく、灣内には船が八艘ほどかゝつて居り、折節一艘の船が徐々として運河から出て來るところであつた。

ランチで上陸した。三人の英人も混へて十四人の一行であつたのであるが、直ちに自動車に分乘、私達の自動車には横光、工藤の二君が乘つた。波止場に上つた時分に、章子が持つて居た鞄をいきなり土人が持ち去つた意味が分らなかつたが、自動車が稅關らしい處に止つたので始めて合點が行つた。章子が下りて其稅關の中に這入つて行くと、官吏は章子を見て笑顏を作つて鞄を

開けても見ず白墨で印をつけて渡して呉れたさうだ。

間もなく砂漠にかゝつた。鴉が飛んで居るので砂漠にも鴉がゐることが分つた。

天幕を連ねてその天幕の外に人が寢て居るのが見えた。日陰も何もない處に平氣で寢て居るので、隊商でゞもあるのかと始めは不思議に思つたが、後になつて是等の人は道路工事をして居るのであると云ふ事が分つた。路は鋪裝になつて居て、其上を走る時分には六十哩のスピードを出して疾走するので、若し石ころでもあつて其に打當つたなら此自動車は顚覆破壞するであらうなどと工藤君は恐れをなした。見渡す限り一つの障碍物もない砂漠の中の道を行くのであるから、そんなスピードを出す事も出來るのであつたが、それでも時々向ふから來る自動車に摺れ違つたりまたは極たまたま人に出會つたりする事もあつた。又、鋪裝のしてない處もあり、その道も割合によい道であるが、然し一旦そこにかゝると埃が濛々と立ち上るのには閉口した。天幕が並んで居て、その天幕の傍に澤山の小石が積み重ねてあり、またその邊の小高い處に人夫が鶴嘴のやうなものをもつて小石を掘り出して居るのを見て、埃及人の運轉手はアスファルト、と云つたので成程だん〳〵其道も鋪裝をして行くものであると合點された。と同時にまた砂漠の中にところどころ小高いところがあるのは、單に風の吹き溜りといふではなくて、下には小石の堆積がある

ことが分つた。

英國の兵隊の自動車三臺に乘つて來るのに會つた。また巡査が駱駝に乘つてこの砂漠の中を巡視して歩くのだと云ふ事を運轉手が話した。

鳥取の濱坂の砂丘は曾て見た事があるが、そこは海岸の白砂がづつと幅廣く陸地の方迄廣がつてゐて、其起伏が雄大と云ふ許りであつたが、今や天下に隱れないアフリカの砂漠に來て見るとその濱坂の砂丘とは大變な違ひであつて、黃色い砂と云ふか土と云ふか、さう云ふ土地の連續が一望際涯なく續いて居るのであつた。世界地圖で見てもスエズからカイロまでは可なり距離があるのであるが、それを四時頃から七時頃までに長驅しようと云ふのであるから並大抵な事ではない。然も其間は、人家も人間も殆ど居ないと云つてよい處を駈けるのであるから、痛快と云へば痛快である。

ところ〴〵にステーションと呼ばれてをる極めて小さい建物がある。何のステーションか分らないが休憩所見たやうなものであらう。然しそこにも餘り人は居ないやうであつたが、ふと或るステーションの前に仙人掌が三株ほど植ゑてあるのを見た。珍しいなと思ふ中に風の如く過ぎ去つてしまつたので充分に觀察する事は出來なかつたが、是はたしかに他から持つて來て植ゑたも

のに相違なく、つまり此ステーションの庭木（?）として植ゑられたものであらう。廣大な砂漠の中にこゝに唯三株の仙人掌が植ゑられて居ると考へるとおもしろかつた。

が、砂漠だと云つても全く草や木の無いことはないのである。前に、船からソマリランドの一角を見た時分に、砂漠の上に點々としたものゝ見えるのは苔の種類であらうと云つた事を書いて置いたが、それは埃及でザラと云ふ草ださうで、この草は水の無い砂漠の土に尙よく生を保つものと見えて、澤山ではないがこゝでもぽつ〳〵とあるのであつた。それにまた極めて稀ではあるけれども一里に一つ位づゝ木が立つてをつて、其木が埃及語でヂヤガラと云ふさうで、餘り丈高くはないけれども幹があつて、枝の先には針があつて、茂ると云ふ程ではないが、葉を出して居た。運轉手の話に、三月雨が降つて三月乾き、三月極暑で三月やゝ暑いと云ふ事を云ひ、それで一年間の概略の說明になつた譯ではあるが、然し砂漠地帶の氣候を說明する言葉としてはそれだけでは尙不明瞭であつた。が、唯砂漠でも雨の降る時がある事だけは明かであつた。

そのヂヤガラの木の一つに鳥が止つて居た。何鳥であらうか、若しや鷹ではあるまいかと振返つて見たが何鳥か分らなかつた。唯自動車が疾走するに拘らず靜まり返つて止つて居るところは猛鳥であるかに思はれた。砂漠を渡つて、稀にあるヂヤガラの木に翼を休めて居るものと思はれ

た。

或所の鋪道工事をして天幕生活を營んで居る傍に小さい建物があつた。運轉手がそれを見て、「ヂヤパニース、お寺、モハメツト、モスク、埃及、ガーマ」と單語を並べて云つた。さう思つて見れば成る程小さいながらもモスクらしい建物であつた。回回教徒は信心が厚くてこんな砂漠の中にも尙お參りする寺を建てたものであらうと思はれた。

遙か遠方の方に埃が棚曳いて居るのは私達の自動車よりも前に行つた自動車であると云ふ事が想像された。車體は見えず唯砂埃が上つて居るので、丁度水平線上に煙が上つて居るのを見て船を想像するやうな鹽梅である。

眞赤な日が今や砂漠に沈まうとして居る。荒涼とした中にも美しい景色である。赤々と云ふ言葉があるがさう云ふ形容はこゝの入日を描くのに最も適當して居る。それに印度洋で見た夕日もさうであつたが、太陽の形が正視が出來るほど艶消しになつて居て、赤い大きな銅盤が沈むのである。私達は一寸車をとゞめて、この夕日を見ながら船で拵へて呉れた折の中の結飯を取り出して手摑みで食ひ、その側に入れてあつた鹽鮭の一片をも食つてしまひ、それから壜に入れてあつた茶をがぶ〳〵と口飲みにした。寫眞機を携へて居るものは入日の落ち込んでしまはぬうちと急

いでパチ〳〵と撮つた。章子も其中に加つて撮つた。

カイロ行砂漠に沈む日を見たり

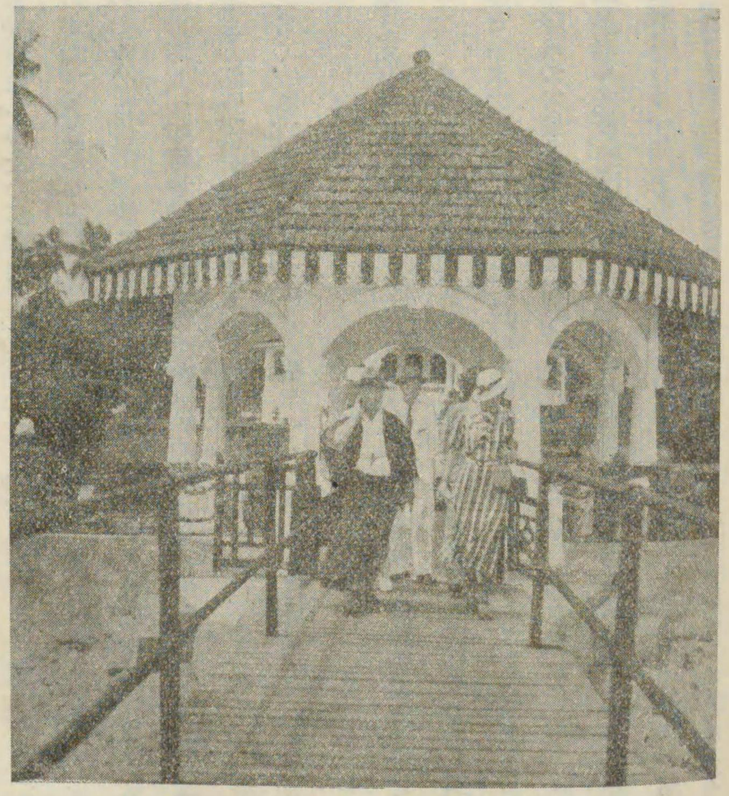
まだ半分過ぎ來た位のものであつて、それから更に全速力を出して自動車は長驅したのであるが、砂漠はだん〳〵と薄暗くなつて來て、今は砂漠の中を駈けると云ふよりも唯光りに照らし出される道路の長く〳〵續いて居る上を一途に駈けて行く心持であつた。晝間からも氣が附いて居つた事であるが、道の左右に、石ころが塡めてある圓い桶のやうなものが一定の間隔に置いてあつて、それが白いペンキで塗られて居つたのが、自動車のヘツドライトを受けて屈强な目印となつて居た。それはスエズを出てカイロに達するまで續いて居た。

月が無いのが惜しい樣な心持もしたが、また慾に月光が無いはうが此時の荒寥たる氣分には適はしい樣にも思はれた。

月も無く砂漠暮れ行く心細そ

やがて地平線にチラ〳〵と燈火の連りが瞬き始めた。それがカイロの灯であることは問はずとも明かであつた。やがてその燈火が段々と我が車に近づくと覺えてゐるうちに、忽ち大きな建物が暗の中に突立つて居るのが目に止つた。それは王宮であるとの事であつた。驚いた事には今も

新嘉坡玉川ガーデンにて——前列章子・虚子



で來て居つた道の左右は全く砂漠であつたのが、突としてここに王宮を見ることであつた。カイロの町は砂漠の中に建設された町であるのかと驚かれたのである。汽車の踏切があり、そこを過ぎるともう市街の中に這入つて行つたので、明るく燈火が點いてをり、電車も通れば自動車も通つて居た。だん〳〵賑かな町に這入つて行き、此邊が市街の中心地であらうかと思はれる處も通つた。「名古屋ほどもあるだらうか」「いや名古屋よりも大きいであらう」といふ人もあつたが、實際カイロは名古屋よりも大きく、英吉利のグラスゴー、獨逸のハンブルグにつぐ世界の大都市の一つである。

メトロポリタン・ホテルに著いた。ロツビーに暫く休んで、南部から附けて呉れた案内人がおのおのの室を極めて呉れたので、私達は五階に案内せられた。そこには埃及人の長い衣を著たボーイと一人の露西亞人であるといふ女ボーイが居て、五百一號室と五百二號室とに私と章子とを案内して呉れた。私は部屋に這入つて見ると大變暑いので、スチームが通つて居るのかと聞いたが、さうでは無いとの事で窓を開けて僅に涼を取つた。下の食堂で晩食を食ふことになり、一應行きはしたが先きのお結飯で腹はもう一杯であつた。部屋に歸つて埃を流さうと思つて章子の部屋に石鹸を取りに行つたが、章子も風呂に入つて居るのであらう、ドアが固くしまつて居てノツ

クしても返事がない。尙ノツクすると、女ボーイが廊下から顏を出して、スリープ、スリープと腕を枕にして見せたので面倒くさくて止めた。

バスに石鹸も置いて無く、石鹸を注文すると一志を請求するといふやうな荒涼たる感じの宿ではあつたが、草臥れて居たので存外たやすく眠ることが出來た。

三月二十二日。

朝、窓の下を物賣が聲を張り上げて通るのであつたが、その聲のアクセントが私の鄕里伊豫の松山で聞くのとそつくりであつた。不思議に思つて耳を峙てた。

朝、七時半食堂に行つた。

八時二十分頃、案内者に連れられて自動車に分乘、昨日の通り。

町を通過してナイル河に出た。ナイル河と云へば世界有數の大河であつて揚子江よりも延長は勝つてをるが、揚子江は河口近くなると一望際涯のない海のやうな眺めであるのと異つて、ナイル河は終りになると幅が狹くなると云ふ事を聞いて居つたが其通りであつた。もつとも澤山の支流が分派して海に注いで居るのであるから、その水を合したならば可なり大きなものになるので

あらうが、こゝで見る流れはまことに狹く、先づ隅田川位のものであつた。橋頭に三越の前にあるやうな獅子の像が坐つて居る橋を渡つた。橋の眞中に車を止めて寫眞を撮るものもあり、景色を眺めるものもあつた。左右の人道には絡繹として人が通つてをり、多くは土耳古帽を戴いてを
る瀟洒な洋服姿の若い人々であつて、學生かと思はるゝものもあるし、また紳士もあつた。自動車も來れば驢馬に乘つかつて居る人も來た。女は黑い布を頭から被つて下半面を覆面して居るのが多いが中には、一見歐洲人と見紛ふやうな、然も白く白粉を塗つて居るものもあつた。皮膚の色は先づ日本人に近いが、然し種々樣々で、ニグロの血が混つて居ると思はれるのもあるし、歐洲人の血が混つて居ると思はれるのもあつた。

川の水は濁つて居つた。川を挾んだ建物は先づ五階位が一番高い建物で、大概三階位であるやうに思へた。それが兩岸に添うて建並んで居た。岸には椰子の並木があり、澤山の船が繫いであつた。船は帆柱に特色があつて、大方椰子の樹を削つて作つたものであらうと思はれるが、船に比較して其帆柱の方が遙に太く長く然も少し彎曲して居るのが面白く思はれた。

橋を渡ると公園もあり動物園もあり、やがて麥畑もぽつ〳〵見えて來た。向ふにGizaの大金字塔（ピラミッド）と、も一つやや低いのが見えた。私達の行く方向に電車が走つて居た。

やがて金字塔の眞近に來ると、自動車を下りて、道傍に澤山の駱駝が並んで居る、それにめいめいは早や乘り始めて居るのであつた。私達二人もやがて乘つた。

早や金字塔の方を目指して駱駝は進んで行くのであつた。一人づつの土人が其駱駝に付いて居て、時々私を見上げて「グード？」などと聞いた。金字塔の下まで行つて見ると、その邊まで行つて居る自動車も二三臺あつた。皆が駱駝に乘つたまゝ圓陣を作ると、案内者が鞭を振つてこの金字塔の來歷を一々說明するのであつた。

この金字塔は高さ四八一呎、面積十三エーカーで、六十七個もある金字塔の中で最高最大なものであつて、第四王朝クウフ王によつて建設されたものであると云ふやうな事を說明した。

この金字塔は少し小高くなつて居る陵丘の上に建つて居るのであつて、下を見下ろすと沃野千里と云ふ風に、麥畑、棉畑等がカイロの町を包んではるかに遠くつらなつて居るのであつたが、この丘陵の上は總て砂漠であつて、其砂漠も亦限りなく續いて居るのであつた。

ナイル河の氾濫が兩岸の土地を肥沃にして埃及文明を齎したものであると云ふ說は古くから聞いて居たが、今親しく此地に莅んで見るとまことに其通りであると思はしめるものがあつた。ナイル河の水を引いた低地は沃地が千里に連つて居て、その範圍外である土地は皆砂漠の連續であ

るのである。今はナイル河の氾濫と云ふ事も少なくなり、それは澤山の運河に導き引いて灌漑用水となつて居るのである。

この金字塔の立つて居るところは、土地が少し高い爲に、ナイル河の恩惠を享けないで五千年の昔から今日まで砂漠地帶の一角であることは爭ふ餘地がないのである。

その金字塔の前を通過して、凹凸の道を駱駝の脊にゆられて行くと、やがてスフインクスの前に達したので、觀覽客は前後二列になつて並び、前の列は駱駝を坐らせて寫眞を撮つた。

それから駱駝を下りてスフインクスの隣にある石の建物に這入つた。そこの建物はもとスフインクスに屬したお寺であつたらしく、アラバスターと云ふ石英の種類の石と御影石と石灰岩で堅牢に出來て居ると云ふ事であつた。

スフインクスのそばに立つて大空を見上げると、澤山の鳶が舞うて居るのが目に止つた。スフインクスは一枚の岩を刻んだものであつた。回々教徒が射的の標的にした爲に鼻缺げになつたと云ふ事であつた。皆がスフインクスを見上げて寫眞を撮つたり撮られたりしたのであつたが、風が強くて砂漠の砂が飛んで來るので困却した。

スフインクスの後ろを廻つてまた駱駝に乘り、前の金字塔の處まで歸つて駱駝を下りた。それ

から導かれるまゝに金字塔の中に這入つて行つた。

中は眞暗で、ところ〴〵に暗い電燈が點つて居るので漸く黑白を辨ずる許りであつた。段々のやうになつて居る坂を鐵の手摺につかまりながら上つて行くと、處々に躓まねば上つて行けぬ處があり、それが可なり長く續いて居るので皆一方ならず苦しんだ。餘程上つたと思ふ時分に王の柩を置いた處と云ふ空室に達した。ミイラの這入つて居つた石棺が未だ存して居た。尤もミイラはもう無く唯空しい石棺がある許りであつた。尙他に寶物が隱してあつたと云ふ空洞もあり、また風通しの爲の穴もあつた。

それから少しく後戻りをして、また別の分れ路を通つて暫く上つて行くと、今度は王妃の柩があつたと云ふ處に出た。この王妃のものは羅馬が攻入つた時分に、そのミイラはもとよりの事、寶物一切盜み取られたのであらうとの事であつた。

表に出て外面の光に接すると眩惑しさうに明るかつた。そこに待つて居た自動車に乘つた。

ナイル河の橋を渡つてカイロの王の邸と云ふ前をも過ぎ、また金持の住宅地だと云ふ壯麗な家の建て連つてゐる邊りも過ぎた。ヴエニヒイシクと云ふ美しい花の咲いて居る木がその邊に澤山あつた。やがて埃及博物館の前に車を止めてその中に這入つた。

先づ發掘された大きな石の彫像やミイラが林の如く立つて居るのに驚かされた。それから二階に上つて見ると、最近ツタンカーメンの墳墓を發掘して得た澤山の寶物類を並べてあるのが目を驚かした。その寶物の中に私だけに目に止つたものは、金の履物が澤山ある中に金の草履があつた事であつた。それは日本で見るやうな鼻緒の附いて居るものであつて、現在私の履いて居る草履と比べて構造上何の相違もない事であつた。ツタンカーメンの時代は紀元前二千年と云ふ事であるから、凡そ四千年前になるのであるが、足の指の間に鼻緒をはさむといふことは此時代にも當然行はれてゐたことが證明される。

それからまた或る室では、掘出された澤山の石像、木像、銅像等があつたが、それ等の顔は各個性を備へて居つて、今日街上で見る人を寫生して得た作品と云つてもいゝやうな感じがした。

博物館を出てから一度前のホテルに歸り、晝飯を濟ませ、二時頃から市中見物と云ふ事になつた。先づモスクを見物する事になつて、始めて行つた處は七百年前に建つたものであるが、ナポレオンが埃及征伐をやつた時分に中の財寶は皆取り去られてしまつたのであつて、餘程頽廢して居つた。ナポレオンが擊つた大砲の彈が今も尙殘つてゐると指し示した處を見ると、まことに壁の中に大砲の彈が打ち込んだまゝになつて居た。

次に見たのは六百年前に建つたモスクであつた。靴にカバーを穿かせて上らせた程で、下には絨氈が敷き詰めてあり、內部の裝飾も金色燦爛として立派なものであり、ドームは總てモザイツクであつた。若い埃及人の夫婦が居つて、女は黑布を頭から纏うて居つたが、それが愼ましやかの態度で私達の後に從うて來るのが目についた。別室には埃及の獨立した初代の王モハメツド・アリ並に今の王の兄ハード第一世の墓などがあつた。

表に出ると酒を賣つて居る男があつた。肩から大きな金色をした壺を吊して居り、手に二つの輪の玉を持つて居つてそれを打合して別に聲も立てずに賣つて居るのであつた。それは最前寺に這入る時に居つたのであるが出て行く時も尙同じ處に立つて居た。

第三に見たのはお寺ではなく、宮殿とでも云ふやうな處であらうか、今は頗る頽廢して居つて壁なども罅の這入つて居るまゝであつた。モハメツド・アリもこゝに住んでをり、ナポレオンが此地を攻めた時分にもこゝに居たとかで、其ナポレオンが浴みをした浴槽であると云ふ處にも案內した。その浴槽はアラバスターで作つてあると云つて、案內者はマツチをすつて其石の透明なのを見せたりした。

窓からカイロの市街を展望した。そこから見る市街は直ぐ砂漠に接近して居て、今日は風が强

い爲であらう埃が一面に立ち罩めて居た。遙に空際に見える金字塔も埃の上に浮んで居るやうに見えた。

表に出ると、そこに英國の兵隊の屯所があつて、四五人の英國兵が出入りして居るのが目に止つた。

それからゆる〳〵自動車を驅つて町の見物をすることになつた。

車をとある狹い町に入れた。そこは古い町と思はれるやうな商店が並んで居て、男も女も子供もグヂヤ〳〵と往き來して居て、その中へ我々の車が警笛を鳴らして進んで行くのが一寸氣が引けた。道行く人は皆嶮しい目をして私達の車を見送つて居るやうな氣がした。

それから郵便局やオペラハウスなどのある通りに出て、ナイル河に添うて河沿ひ道を暫く行つた。散歩道路とも云ふべき處に並木があるのを運轉手に何と云ふ木かと聞いた處が、

「ジヤガラ、昨日の木と同じ。」

と答へた。然し木の先きに針が出て居るやうな處は見當らず、綠葉が茂つて居て一寸同じ木とは思へなかつた。

橋を渡ると、そこには種々の運動のクラブがあつたり、パブリック・ガーデンがあつたりする

處に出た。

また獅子の居る橋を渡つて、しばらく町を通つて四時過ぎにステーションに行つた。間もなく案内人に導かれて汽車の中に這入つた。我等が乘つた後で汽車の昇降口は錠を下ろして這入れぬやうにした。小盜人が多いのかもしれぬ。物賣が澤山に窓口に集つて來た。

五時三十分に發車した。

見ると麥畑に雀が飛んで居たり、駱駝が畦道に立つて居たり、田園の景色が目の前に展開して來るのであつた。殊にところ〴〵に河があつて、それは皆ナイル河の水を引いた運河であらうと思はれた。其河のほとりには椰子が繁茂して居るし、また針葉樹もあつた。畑に人が居るし、馬が通り、牛が通り、村情野趣は日本と似たものがあつた。入日は遠く椰子の林の中に落ち込むのであつた。

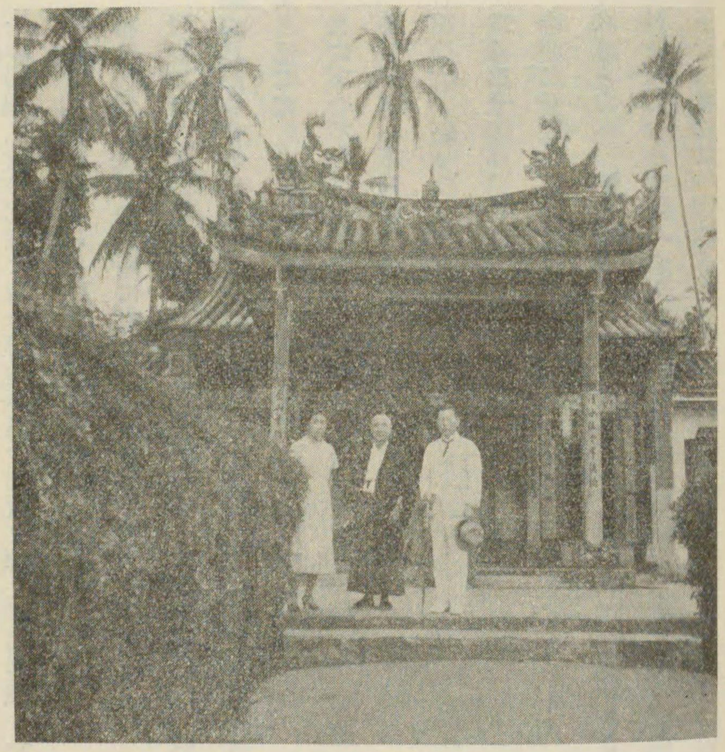
ふと氣がつくと汽車は蘇士の運河に沿うて走つて居るやうであつた。が、窓に顏を當てゝ覗いて見ても外面は唯暗い闇であつた。

十時前にポートサイドに著いた。楠窓君が迎ひに來て呉れて居た。相携へて南部の店に行き、そこで今日スフインクスの前で撮つた寫眞の出來て居るのを受けとつたり、昨日今日の旅費の勘

定をしたりして、それからランチに乘つて船に歸つたのは十一時が近かつた。
友次郎から手紙が來て居た。
ピラミツド見物の埃を浴槽で洗ひ落し、十二時前、草臥れた體を寢臺に横へた。

地中海、コルシカを望む

三月二十三日。
時計二十分遲れる。
昨夜半より船動搖。その爲に兩三度目が覺めた。
今日より浴槽がまた立つた。
章子は起きない。
友次郎に返電。



子章・子盧・愚潮——てに寺蛇ンナペ

十一時楠窓君の部屋に行き講演草稿の朗讀を聽き、其草稿を受けとつて歸つた。
晝寢。手足が痛いのは昨日の疲勞と覺えた。
四時過ぎ楠窓君の部屋に行き揮毫。六時半に到る。
晩食の時、楠窓君の話に、昨日私達がカイロに居る時分に、伊太利の船が一艘、坡西土に著き碇泊したのであつたが、エチオピア行の兵隊を溢れるやうに滿載して居つて、其等の兵隊は箱根丸を見て盛んに歡呼の聲を擧げて居つたとの事であつた。
夜になつて草臥れが出て眠く殆ど無爲。
海が靜かになつた。熟睡。

三月二十四日。
時計二十分遲れる。
窓早く白み、熱帶地方よりも日永くなり、聊か短夜の感がある。
甲板に出ると希臘のクリート島が前面に横はつて居て、其中に雪の峰が峙つて居た。全島が禿山と云ふではないけれど、木が餘り無い。向ふ側はどうか知らないが、こちら側から見たところ

では山が直ちに海に落ち込んで居て、砂濱らしいものもなく、漁村らしいものも一向に見えない。
午前七時頃から午後一時頃まで此島に沿うて航した。一時間十四浬、六時間で、島の長さ大略八十四浬と云ふ勘定になる。
浮袋の練習があつたが私達は出なかつた。
電報四五通を打つた。
例の如く鷗が飛んで居た。
散髮。序に楠窓君の部屋に寄つて揮毫少々。
荷物片づけ。
口授筆記。
晝食後章子荷物片づけ。八木女ボーイ手傳ふ。
口授筆記。
夜、活動寫眞。私は室に籠つて文章訂正。
十時半寢る。

三月二十五日。

時計二十分遲れる。

電報十通ばかり打つ。

荷物を片づける。

午後章子、八木女と共に荷物を片づける。

午後二時から口授筆記、揮毫少々。

四時部屋に歸り文章訂正。

五時半頃甲板に出て見ると、シシリー島が左舷にあり、メツシナの町が見えて居る。エトナの噴煙は雲に遮られて見えない。右舷に出て見ると伊太利本土が目睫の間にあつて、レヂオと云ふ町が前面に横はつて居る。殆ど山許りで、海岸に町があるが、その町も半ばは山腹に延びて居るのである。山は大方禿山で、多少の木があるのは、橄欖が栽培してあるのであらうとの事であつた。大きな川が二筋程海に流れ込んで居るのが見える。汽車が煙を吐いて、見て居る中に三度ばかり通つた。此處をメツシナ海峽といふのであつて、此海峽を通過する間甲板に出てをると非常に寒く、冬の外套を取り出して著る位であつた。尙シシリー島には、パレルモと云ふ町があつて、

そこは先年日本に歸つて來たラグーザお玉が五十年近くも住んで居つた處であるといふことであつた。

晩食後口授筆記。

九時四十分頃、楠窓君に導かれて、森川夫人、章子等と船橋に上り、ストロンボリの火を噴く島を見た。

始めは海上暗く島の形もはつきりしなかつたが、よく見てをる中に、餘り大きくない富士山形の島が見えて來た。そこに燈臺が瞬いて居て、人家らしい灯が二三見えて居たが、船が進むに從つて、やゝ島の横手を見るやうになり、山の頂から少し下つた所にチョボ〳〵と赤い火が見えて來た。それが噴火して居る火であつた。

暫く待つて居る中に、大きな火の固りが現れて、少し下の方に延びるかと思ふことがあつた。それがやゝ大きく噴火した時の光景であつた。晝間見ると熔岩が流れ落ちて海に達することがあるさうである。此島には、白堊を固めたやうな家が數へるほどあるばかりで、そこに住んで居る人は橄欖の栽培をしてゐる人であると云ふ事である。三十分許り船橋に在つて下に降りた。

外套を著て船橋に立つことも

十時半寢。

三月二十六日。

時計が三十分おくれた。

朝は相當に寒かつた。これ位なら綿入れを著てもよからうと、綿入れを出させて著た。

朝食後ちよつとラウンヂに出て皆と話した。私は此航海中ラウンヂに出て皆と話すことは極めて稀であつたのである。

成瀨君が挨拶に見えた。

楠窓君の部屋に行つた。少々揮毫をした。

午食後此船で持つて歸つて貰ふ大風呂敷包を楠窓君の部屋に屆けた。

口授筆記。揮毫少々。楠窓君の「一日一信」の朗讀を聞いた。

荷物の殘り片附け。

甲板に出て遙にコルシカ、サルヂニヤを見る。

荷物の片附け終る。

また甲板に出て丁度夕日のコルシカ島に落込んでゐるところを見た。コルシカ島は薄墨色に前面に横はつてゐる上に、金色の夕日が落込んでゐるところは美しい眺めであり、特に英雄ナポレオンの誕生した所であると云ふ聯想から印象深く眺められた。それに對してゐるサルヂニヤ島は同じく英雄ガリバルヂーの生れた島であつて、それはコルシカ島よりもやや近く我が船に沿うて長く横はりつゝあつた。其サルヂニヤは伊太利領、コルシカは佛蘭西領で、兩島の間は一衣帶水を距てゝゐるばかりである。其間を我が船は航行すべく針路を取つて進みつゝあるのであつた。

コルシカに春の日赤く今沈む

またしばらくしてから甲板に出て見ると、もう日はとつくに落込んでしまつて、コルシカにもサルヂニヤにも澤山の燈臺の灯がともつてゐるのを見た。黑雲がやゝ低く物すごく棚曳いてゐて其間に細い上弦の月がかゝつてゐた。

コルシカに春の夕月細かりし

サヨナラ・ディナーなる食堂が開かれた。これはマルセーユに上る旅客に別離を敍する意味の夕食である。食卓にクラツカーが置いてあつて、皆がパン〳〵とそれを鳴らしたり、食事半ばに投げテープをしたりして、一同は陽氣に食事をした。私は間もなく部屋に歸つたが、後で西洋人

が二人起ち上つて挨拶をし、日本人の旅客を代表して増田君が立つて挨拶をしたと云ふことであつた。

楠窓君の部屋に行つて、私等が英國に行く日の旅程をつくり、友次郎が來たら相談することにした。それから船のボーイ達のチップ等の相談をして十時半頃船室に歸つた。船の動搖が大分はげしかつた。

章子はもう寢んでゐた。」

マルセーユ上陸

三月二十七日。

時計が三十分おくれた。

船の動搖がしづまつた。

甲板に出てみるとマルセーユの港は前方にあり、船は防波堤を目指して徐行しつゝあつた。一艘の小蒸汽が我が船を指して近づいて來ると思ふと、それには水先案内が乘つてゐて、やがて舷側の繩梯子をする〳〵と上つて一人の日に燒けた西洋人が乘り込んだ。防波堤の内に這入ると其水先案内の案内の下に更に徐行をして遲々として進んだ。マルセーユの港は防波堤の長く續いてゐる内側にあるのであつて、棧橋とおぼしきものは無數にあつて、それに各國の船がかゝつて居るのを見るのは壯觀であり、どことなく物淋しくもあつた。我が船は其側を徐々と過ぎて行くのであつたが、遙に郵船會社の船の赤い條の入つてゐる帆柱が見えてきて、それは歸航の途にある僚船香取丸がかゝつてゐるのであることが判つた時はなつかしかつた。我が船は狹い水路を辿りつゝ香取丸に近づいて、やがて曳船に引かれてその隣に投錨した。そこは郵船會社の棧橋であつた。香取丸の船客はしきりに國旗を振つて我が船の這入つて行くのを迎へてくれた。

之より前に巖窟王のゐた嶋と云ふのが港近く見えてゐたが、其嶋をはじめとして他にある島も悉く石灰岩で木は一本も無く、又陸地にある山も皆全くの岩山であつて、日本で見る山とは全く感じの違ふものであつたが、しかし熱帶地方で見た岩山とは違つて紫色を帶びてゐて、それに日の光が柔かに當つてゐるのは美しく眺められた。さうして麓には松の林や又木の芽の吹いてゐる

木などもあり、よく見ると麥畑かと思はれる青い畑もあつて、溫帶地方の春の景色が目のあたりに展開されたかの感があつた。

私達は甲板に出て棧橋の上を見おろして友次郎は來てゐるかと探すのであつたが、友次郎は固より出迎人らしい人はひとりもゐなかつた。我が船は豫定よりも一日早く著いたのではあるが、其ことは電報で友次郎に云つてやつてあるので、よもや來ないことはあるまいと思つてゐるうちに、向ふの方から白い外套を著て此方に近づきつゝあるのは誰かと思つて見ると、それは友次郎であつた。手を擧げたから此方も手を擧げて合圖をした。章子は躍り上つて喜んだ。あとで聞くと、一番我船に近いと思つて香取丸に乘つて居つて甲板に出てゐる私達を見てしきりに合圖をしたが、私達はちつとも其方を見なかつたと云ふことであつた。友次郎の他にもう一人日本人がゐるのは誰であらうかと不審に思うたのであつたが、これは多川君が迎へに來て呉れたのであることがあとになつて判つた。

友次郎と漸く手眞似をまぜて話が出來る程に船が近づいたので、船に來て朝食をくつたらよからうと傳へておいて私達は食堂へ下りて食卓についた。

食堂を出て楠窓君の部屋へ行つてみると、友次郎も其所に來て居つた。やがて旅券の檢査があ

つたので早速友次郎を連れて行つたが、それは極めて簡略にすんだ。又圓をフランに替へねばならぬので友次郎を介して船に來た兩替屋に兩替をしてもらつた。多川君も來たので一別以來絶えて會はなかつた挨拶を匆々にして、すぐ荷物の世話を頼んだ。園田と云ふ此地で旅客の世話をする男も來て往つたり來たりかなりごた〳〵したが、多川君が友次郎と章子と一緒に荷物を稅關に持ち込んで檢査を受けるのに大分時間を費し、漸く停車場に一時預けにして歸つて來た。

しばらく楠窓君の部屋で友次郎と相談をした。友次郎の都合で六月末まで佛蘭西にゐて歸ることに概略相談がきまり、英國へは四月の末に出かけることになつた。

荷物の方も落著し、相談もあらかたきまつたので楠窓君を誘ひ、四人でマルセーユの街をドライヴすることになつた。

マルセーユには伊太利人、西班牙人、アラビア人、それから近東の人々が多いのださうで、それらの人々が構成してゐる南國の町であると云ふ感じが強いとのことであつた。話の調子や動作などが大げさであつて、さういふのを「伊太利的」ともいひ又「マルセーユ的」とも云ふのであるとのことであつた。

しばらく漁師町を通つた。日本の漁師町と似通つた感じもあつたが併し大分綺麗であつた。道

ばたにぼんやり佇んで居る人が多いのは生活の目的のないならず者が多いのかとも思はれた。

車は廣い街に出た。大きな街路樹が左右に突立つてゐて林の中を行くやうな感じであつた。其街路樹はプラタナスであるとのことであつた。電車が街路に沿うて道の左右を通り、自動車が中央を通ることになつてゐるらしい。これが車道であつて、其外側に人道があつて、更にまた其外側に家の前の通りがあつて、物靜かな、大きな、い〻町だと思はれた。

後に聞くところによると、此マルセーユと云ふ町は佛蘭西でも巴里、里昂につぐ大きな町であつて、又地中海沿岸の古い港と云へば伊太利のゼノア、西班牙のバルセロナ、それに此マルセーユであるとのことであつた。

それから銀座通とも云ふべき殷賑なところを通つて、明日乘る汽車の座席が無いと困ると思つて、停車場に行つて切符及び座席券を買つて置いた。停車場も物靜かであつた。

それから船に歸つて夕食をたべ、私達二人も友次郎も此夜は船に泊ることになり、三人で物靜かな一夜を雜談に過ごして、寢についたのは大分夜が更けてゐた。

三月二十八日。

朝七時に箱根丸が出帆するとのことで、六時三十分トーストと牛乳を船室に取よせて朝食の代りとし、船長が挨拶に來たのでこちらも船長室に挨拶に行き、楠窓君と別離を敍しすぐ樣下船することにした。

楠窓、船長、八木女等に見送られつゝ棧橋に來てゐる自動車に乘ると船も出帆合圖の銅鑼を鳴らした。

停車場に行つて見ると、私等の乘る汽車の外にもう一つ汽車があつて、之は違つた方向に行くのであつた。兩方共に佛蘭西人の乘客がぼつ〳〵乘る。同船して居つた日本人は大方此汽車に乘ると見えて、一室を其人々で占領してをつた。私達三人は別の室に乘つてをるとやがて一人の職業婦人かと思はれるやうな佛蘭西婦人が來て乘つた。

暫く下りて、窓外に立つて私達を見送つてゐる多川、園田兩君と話をした。其邊を往來する人が皆私の身なりを一應見て、最後には草履に目をとめて不思議さうに其を見るのであつた。之は昨日船を降りるとからもさうであつた。又カイロを歩いてをる時もさうであつた。

靜かに停車場の容子から汽車の容子、乘客の容子などを見ると、全體が落著いて物靜かであるが活氣が無く新鮮なものが無いやうで、どことなく老大國といつた感じがするのであつた。

發車迄には一時間許りあるのをぼんやり待つてをるうちに辨當を買つたり、友次郎は隣室に行つて皆佛蘭西語が分らぬ人達なので何かの面倒を見たりした。

漸く發車すると間も無く郊外に出て田舍の光景が展開された。今が春の盛りかと思はれる景色で、青々とした麥畑があり、菜の花とは違ふが其綠麥と混つて黃色い花の咲いてゐる畑があり、梅とも違ひ櫻とも違ふが爛漫と花の咲いてゐる木があり、一見我國の田園の眺めと違はぬ心持がした。そこにある百姓家は我國のものとは違つて粗末な煉瓦建のものであるが、併し趣は大變似てをつて、其百姓家の側には高い杉の木かと思はれるものが突立つてゐたり、庇をつゝと葺下ろして其下に何かものが入れてあつたり、又壁一面に珈琲の廣告があつたりする。それから田を耕してをる百姓も、洋服を著てをるが古びたきたない服裝で、顏色は日に燒けてをつて、仔細に見たら勿論違ふであらうが、これも一見したところでは我國の百姓と餘り違ひが無かつた。

だん〳〵見てをると赤い花の咲いてゐる桃林があり、白い花の咲いてゐる梨林があり、又葉が出てゐて花の咲いてゐる山櫻と覺しきものもあり、あとで聞くとそれは多分櫻ン坊を採るのが目的の櫻であらうとのことであつた。又先きの梅とも違ひ櫻とも違ふといつたのは、同乘してゐる女の人に友次郎が聞いて見たらアマンデイスの花だとのことであつた。アマンデイスといふのは

扁桃とも巴旦杏とも譯される言葉であるさうだが、杏の一種であることが分つた。此杏の花は見てをるうちにだん〳〵多くなつて來て、杏花村ともいふべき眺めのところもあつた。嘗て朝鮮の北漢山に登つた時、其裏の方に下りると山麓に杏の花の一面に咲いてゐるところがあつて、京城の金持の別莊地であるとのことであり、其別莊の一つに招かれたことがあつたが、一寸其時の情景を思ひ出したりした。

又今度は本當の菜の花の咲いてをるのを見つけた。日本の菜の花ほど澤山には無し、一畝か二畝であるが、たしかに菜の花であつて、はつと思つて見てをるうちに汽車が過ぎ去るのは殘念であつたが其黄色い花の色は長く目に殘つた。これも後に聞くところによると百姓は皆菜種の油をとつて揚げものに使ふのださうである。

いひ忘れてをつたが、一條のかなり大きな川について我が汽車は走つてをるのであつた。それはローヌ河である。佛蘭西は中央の高地から南に流るゝものがローヌ河となり、北に流るゝものがセーヌ河となるのださうだ。其ローヌ河に沿うて我汽車は非常な急速度で走りつゝあるのであるが、私の尤も美しいと驚嘆したのは其ローヌ河のほとりにある雜木林の木の芽である。日本にも白い木の芽はありはするが、此ローヌ河の岸の木の芽はビロードのやうに柔かく、銀のやうに

光り輝いてゐた。彼の杏花村の杏の花はどことなく光澤に缺げたところがあるが、此木の芽は全く花よりも美しかつた。

フランスの女　美しい木の芽また

併し誰一人此杏の花を眺め、此木の芽をふりかへるものは無いやうに思はれた。杏花村は靜まりかへつてゐて百姓はうつむいて耕馬を追うてゐた。

松の樹に似た木があり、杉の木に似た木があり、又田舍の街道には鈴懸並木が遠く連つてをり畑のくろにはユーカリかと思はるゝ木が並んで立つてゐた。

章子がマルセーユで受取つた日本から來た手紙を讀んで傍に置いてゐたら、前の女が覗き込むやうにして何かいつたが通じなかつた。丁度友次郎は隣室に行つてゐたのである。章子は切手が欲しいといふのであらうと察したらしく、其切手を取つて與へると女は嬉しさうにして鞄の中にしまひ込んだ。

友次郎が歸つたので其事を話すと、此女は下品な言葉を遣ふ奴だ、教養の無い女だと言つた。併し何か又友次郎に話しかけたので友次郎はそれに答へてゐた。其切手は支那のものかと聞いたのださうだ。私達を支那人と間違へてゐたらしい。

今迄の山はマルセーユで見た山と同じく岩ばかりの露出してゐる山であつたが、里昂が近くなつた頃、山が耕耘されて段々畑が其頂上迄續いてゐた。

白樺林があり、それを薪に切つてゐるのがあつた。やはり緯度の高い地方であることを思はしめた。

リヨンを過ぎると澤山の美しい牧場があつて牛が遊んでゐた。

ラローシュといふ停車場に著いた。此次は巴里だとのことであつた。ふと見ると雨が降つてをる。友次郎が斯ういふ風に天氣が違ふといふ。南佛と北佛とは矢張り表日本、裏日本の相違があるらしい。

フォンテンブローの森だといふのを薄暮の中に見た。まだ木の芽は少しも吹いてゐないやうであつた。

間も無く巴里の停車場に著いた。友次郎が荷物を受取る間、私は章子と二人でぼんやりと立つてゐた。乘客が自動車に乘つては出で乘つては出でするのを幾十臺見送つたか。其うち漸く荷物が揃つたので一臺の自動車に乘つた。澤山の荷物と私達三人が一臺の自動車に乘ることが出來たといふのは、其自動車の屋根には自由に荷物が積めるやうになつてゐたからであつた。

午後九時頃サン・サーンの友次郎の宿に著いた。主人夫婦は自分達の部屋をあけて私達を待つてゐてくれた。此宿は七階の三階であるが、間數が少いので主人公は今晩から七階の友達のところに行つて寢るとのことであつた。私は一室に通されて、そこがこれから私の部屋になるとのことであつた。章子は友次郎の部屋に同居することになつた。

其晩は粗末な食事で空腹を充たし、風呂で煤煙を洗ひ落して寢た。

此日雜詠原稿、並に手紙が宿に著いてゐた。又楠窓君から電報が來た。

巴里滯在

三月二十九日。（日曜）

午前七時起床、湯に入る。

かねて長谷部少將等の希望で、巴里に來たもの一同が今日遊覽自動車で一廻りして見度いのだ

が、ガイド・ガールのやうなものがありはしようが、いづれも佛語が判らぬので令息に通譯をしてもらへまいか、何時何所に集合するといふやうなことは少將の方で極める、今朝電話で萬事を交渉しようとのことで昨日は別れたので、友次郎に電話をかけてもらふと、二時半、トーマス・クツク會社の前に集合とのことであつた。

此所の主婦はいつでも十二時前迄朝寢をする習慣であつたさうで、私が七時に起きるといつたので驚いてゐるらしかつたが、私は今朝もちやんと七時に起きて自ら湯殿で湯を立てゝいつもの通りにして出て來たのであつた。友次郎の話に、主婦は眠い〳〵といひ乍ら眼をこすり〳〵出て來て、朝飯の支度にかゝつたのであるさうな。朝飯は、米を焚いてくれたのであつたが、何遍も蓋をあけるので、しんのある御飯が出來て、其上鹽を入れて焚いたので變なものが出來上つた。鹽昆布を出してお茶をかけて啜りこんだ。

原智惠子が一寸來たが、晝飯の約束があるとのことですぐ歸つた。

晝飯も矢張り御飯を焚いてくれた。

午睡少々。

友次郎、章子と共に一寸宅夫妻の門口まで行き、日本人會にて金の兩替をし、約束通りにトー

マス・クツク會社の前に行つて見たら一行は皆集つてゐた。トーマス・クツク會社といふのはかねて友次郎の俳句でおなじみであつたマデレーヌといふ寺院の前にあつた。

コンコールドの廣場、シヤンゼリゼーの街、凱旋門、それからナポレオンの墓のあるところに行き、諸官衙を見、ルイ十六世の居つたといふあと、其周圍の古い建物、其中にはヴイクトル・ユーゴーの住んでゐたといふ家等を見、ノートルダム寺院にも這入つて見た。

やさしいガイド・ガールでは無く、英國人だとかいふ年とつた男が佛語でしやべるのを一々友次郎が飜譯したのであつた。

四時半トーマス・クツク會社の前に歸つた。それからすぐ前のカフエーに立寄つて、そこで計算をすまして一同に分れ、私達は日本人會に行つた。

日本人會といふのは狹い汚いところであつたが、そこで日本から來てゐる新聞等を讀んだ。他に日本人が兩三人來てゐた。椎名君と暫く話した。椎名君は此日本人會の書記をしてゐる人であつて、ポーランド人を細君としてをりフランスに長く住んでゐる人であるさうな。

間も無く宅夫妻が來たので久濶を敍し、すき燒を食うて散會した。宅夫妻も九月末には巴里を發ち歸朝する積りであるといつた。

此日も楠窓君より電報一通。

三月三十日。（月曜）

朝七時半、味噌汁、豆腐、漬物を日本人會より屆けて來た。

午前中上野義雄君をアムステルダム街三菱商事支店に訪問した。

宅夫人が來て午食、夕食の世話をしてくれた。

雜詠を見る。

章子、宅夫人に連れられてデパート見物。マダムも友次郎も外出。私一人になる。ベルがなつたが出ず。

三月三十一日。（火曜）

宅夫人が晝前來た。

智惠子も來て、友次郎と共に今夜の演奏會の練習に行つた。

マダムとしづ子さん（宅夫人）と章子と三人買物に出掛けた。私一人留守居をして雜詠を選む。

表のベルが鳴つたが、知らぬ風をしてをる。頻りに鳴る。相變らず知らぬ風をしてをる。暫く間を置いて今度はベルつづけ樣に四度許り鳴る。相變らず知らぬ風をしてをる。

そこへ笑ひ乍らドアを開けて這入つて來たのはマダム、しづ子さん、章子の連中で、あとから宅、友次郎が現れた。はじめベルを鳴らしたのは宅で、宅が來てドアの外に空しく佇んでゐるところへ友次郎が歸つて來たが、生憎鍵を忘れて出たので友次郎もベルを押したのださうだ。私はベルが鳴つても出ぬといふ約束の下に留守番をしてゐたので頑强に出なかつたのである。二人は暫く散歩でもして來ようと下へ下りかけたところに三人が歸つて來たのであつたのださうだ。

共に食事。

佐藤大使から手紙が來た。それは昨日長谷部少將が來訪されて御來遊のことを承知した、晩餐を差上げたいから四月二日に來ないかとのことであつた。

まだ大使館にも顏を出さないでゐたので、其事を詫び、好意を謝して出席の旨の返事を友次郎から出さした。

楠窓君に倫敦宛に手紙出す。箱根丸は四月三日に倫敦著の筈である。

雜詠を見る。

宅歸り細君とゞまる。

夕食後、友次郎、章子、しづ子さん、マダムと共に巴里國立音樂學校ビュッセ教授の級の作曲演奏會に行く。其中に友次郎の作曲が原智惠子によつて演奏されるのを聞かんが爲であつた。ビュッセ教授と握手をした。此ことは別に文章に認めたからこゝに略する。

十一時頃歸る。

四月一日。（水曜）

此日朝から椎名夫人來てくれ日本料理をしてくれる。

大使館訪問、佐藤大使に面會。

雜詠を見る。

しづ子さん來る。

八時、友次郎、章子と上野君招宴に行く。

手紙二通、大使館より屆けくれる。

四月二日。（木曜）

雜詠見終る。

大使館に行き、三谷參事官、高島館員に面會。滯留屆を出して置く。

雜詠發送。今夜シベリア便にて出るとのこと。

智惠子一寸來る。

しづ子さん來て、章子が著物を著るのを手傳ふ。

旅順療病院長森脇襄治君訪ね來る。同君は高野富士子の緣家にて素十に俳句を勸められ作り居り、若し當地に會合あれば出席したしとのこと。少時談話。日沒歸る。

大使の招宴に大使官邸に赴く。折柄來巴中の長岡大使夫妻、長谷部少將、佐藤醇造夫妻、釜苞（かまやち）氏、私等三人。主人側大使夫妻令孃。」

十時半歸る。

四月三日。（金曜）

友次郎登校。

上野君から鰯の乾物を一包屆けくれる。

午後二時、讀賣新聞社の松尾邦之助君が來訪した。佛國のペンクラブから招請講演のこと、又英國ペンクラブから五月上旬招請のことの相談に來たのである。少時談話、「俳句讀本」一冊貸す。

日記つける。

ア　ネ　モ　ネ　は　萎　れ　鞄　は　打　重　ね

日本より手紙二通來る。火、金に手紙著くとのこと。

此日は一日出なかつた。

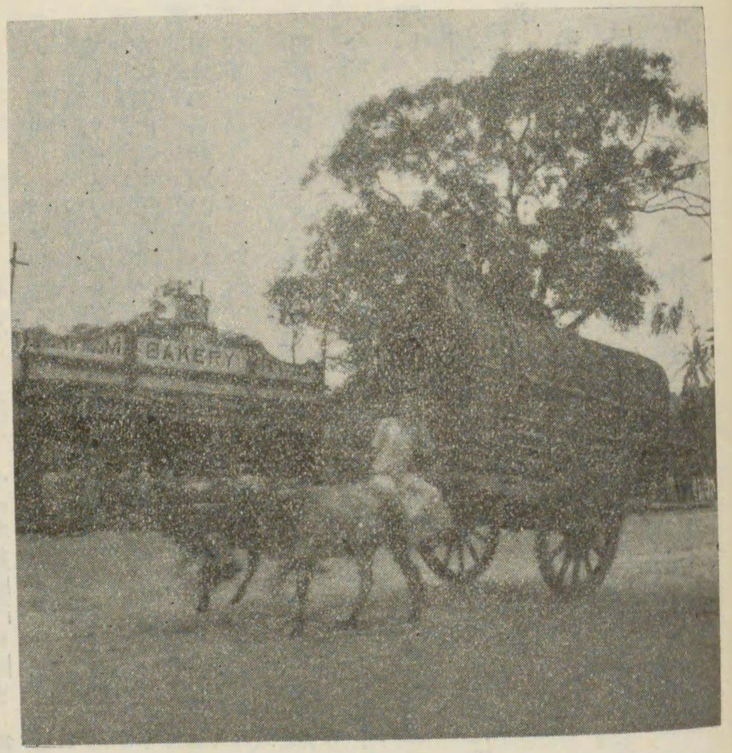
友次郎は作曲淸書。

宅夫妻話しに來り、澤庵の罐詰を土產にくれる。

十時前寢。

四月四日。（土曜）

友次郎登校したが作曲科は休みであつたとて歸宅。



ロロンボの牛車

かねて話して置いた椎名君が來た。先づ其履歴談を聞き、後ち口授筆記のことも話し、謝禮のことも相談した。夕刻歸る。

寒い。ちやん〳〵こを著、羽織を著た。

友次郎に「東洋西洋」を筆記してもらつた。

日本から新聞が來た。それを讀んで十時過寢。

四月五日。（日曜）

今朝は雪を混へた雨が降つてをつたと主婦の話。十一時頃雨は止んだが、依然として曇天で薄暗い。

楠窓君より手紙來。寫眞。一日一信。それにサンデー毎日に送る一文を送つて來た。直ちに轉送。

圭草君より「桐の葉」を送つて來た。大使館より轉送。

巴里に著いて、はじめて手紙數通認めた。

窓の外は春雨すぐに餘所の窓

室暗し春灯いつともしたる

智惠子が來たので晩食を共にしてをるところに宿の主人の姉夫婦が來た。

四月六日。（月曜）

珍しく快晴。窓より仰ぐと青い空が見えた。

時にぴか〳〵と稻妻のやうな光がするのは何であらうかと思ふと、近所の窓ガラスを開けたてする度に光線を反射するものであることが判つた。

中庭を隔てゝ見ゆる向ふの窓には萬年青の小さい植木鉢一箇と空の植木鉢二箇とが並べて置いてある。其下の窓には黑い包みのものとたわしが置いてある。上から二つ目の窓には罐詰の類が箱に詰めて置いてある。窓三つづゝが一軒になつてゐるので、屋根裏ともに九階、ざつと七十二軒の住居であるが、こゝからは凡そ二十程の窓が見えてをる。

眞逆南京蟲ではなからうが、私と章子の二人、此宿に著いてから手や顏をくはれ痒くて腫れ上るので、今日此事を主婦に話すと、主婦多少ヒステリー氣味になりて、藥を寢臺の角に塗るとか部屋の隅に塗るとかし、しまひには大きな寢臺を引き上げて騷ぐのであつた。結局二三日容子を

見てから、若し南京蟲がゐるといふことになれば大家さんに退治してもらふことにして其騒ぎは落著した。

三菱に友次郎と一緒に行き、倫敦の郵船會社支店に電話をかけてもらつた。

丁度伯林の三菱支店の藤室益三氏夫妻が來てをつてそこで面會した。同夫人は立子と女子大學の同窓であつて震災前に鎌倉の宅へも遊びに來たことがあるとのことで、伯林に來い、待つてゐるとのことであつた。

歸ると丁度五時、約束のやうに椎名君が來た。口授筆記。

晩食後友次郎といろ〳〵親戚の話などをして夜が更けた。十二時寢。

巴里俳句會

四月七日。（火曜）

天氣であるが寒い。

ホトトギス、欅、朝日、讀賣、都などが來たので其等を讀んで半日を消した。

ホトトギスを讀んで私の洋行に大變な期待がかけられて居るらしいのに驚いた。今巴里にあつて何を爲しつゝあるかといへば何もせずにぼんやり暮して居るのである。

夜八時、佐藤醇造君の招宴に赴く。佐藤君の宅はオートイユのシヴリー街にあり、此邊は住宅地であつて門内に樹木も稀にはあるらしい。間も無く松尾君も見えた。奥さんの御手料理で、御總菜的なのが何よりであつた。松尾君の語るところによると、倫敦では五月五日にペンクラブの例會がある。其日に來てくれぬかとのことであるらしく、巴里は來月になつてゆつくり日を極めるとのこと。

それより俳句を作ることになり、折柄月があがつたので「春月」五句を課した。

塔見えて樂の音遠し春の月　佐藤綠水

青白く肌照らしけり春の月　佐藤悅子

鈴蘭の花賣り切れぬ春の月　松尾邦之助

春月のあるべき夜半の宴かな　友次郎

春月のパリの都の薄寒き　章子
我宿は巴里外れの春の月　虚子

巴里にて俳句會は珍しいことであるとのこと。地下鐵に乘つて十二時過歸宅。

四月八日。（水曜）

天氣よく、寒し。

午後二時、今度獨逸が兵を出したといつて問題になつてゐる非武裝地帶のライン流域地方は、大戰後一時レナンといふ共和國になつたことがある。其時の大統領であつて、今は亡命して巴里に來て文筆を以つて立つてゐるマテーズ氏が私に文學談が聞き度いといつて訪ねて來た。俳句の話を少々した。其事は別に文章にする積りであるからこゝに省く。

五時椎名君來る。「マテーズ氏」口授筆記。

佐藤醇造君より電話。十七日、日本人會で俳句講演會を開き度いとのこと。

四月九日。（木曜）

好晴。

又蟲にくはれた。毎日少しづゝはくはれてゐるのであるが、目立つてくはれたのは此間と今日である。章子も亦夥しくくはれたらしい。此事が主婦に傳つたので朝飯の時分に又機嫌が惡かつた。

佐藤醇造君に返事の電話をかけた。今夜九時話しに來るとのことであつた。

智惠子が來た。暫く話して歸つた。

此週間を聖なる週間と稱へて信心の厚い家では肉は食はないで魚ばかりを食ふ。從つて魚の値が騰貴してゐるとのこと。明日の金曜は聖なる金曜と稱へて魚も食はない。

此土曜、日曜、月曜がパーク祭で、官衙、會社、皆休み。

次の週間がパーク週間で同じく肉は食はない。

以上午餐の時主婦の話。

原稿を封筒に入れようとする手許に蟲が來た。いきなりつぶすと血が出た。此間からの問題の蟲はこれに違ひないと友次郎に示した。

原稿を數封發送した。

章子鑵詰の汁粉をつくつた。

九時佐藤醇造君來談。十七日午後七時頃日本人會から誰か迎へに來るとのこと。日本叢書表紙に「日本叢書」と揮毫してくれぬかとのこと等。序に、この日曜日に吟行會を催すことの相談をした。

ムードン吟行

四月十日。（金曜）

醇謂聖なる金曜日で午後は殆ど休みとのこと。

吟行會の案内の葉書を左の通り出す。

明後十二日（日曜）ムードンに吟行句作致度く、若し御志あらば御參加希望致候。

一、午前十時エツフエル塔下セーヌ河に面したる所に集合。

一、電車にてムードンに行く。

一、晝食手辨當持參。握り飯にてもパンにても。

一、會費實費。凡そ十五フランの見込。

一、午後五六時頃歸巴の見込。

一、參加人員凡そ七八人の見込。

案内した人々は、佐藤醇造夫妻、松尾邦之助、横光利一、柴官六、森脇襄治、宅孝二夫妻、平尾貴四男夫妻。

晝後、急に思ひ立つて友次郎を促し大使官邸と上野君邸とに此間招宴の謝禮に赴いた。其歸りにシヤン・ド・マース公園を散歩した。こゝはエツフエル塔のあるところで、今破壞しつゝあるトロカデロ宮殿と士官學校とを見通しにする廣い眺めである。天氣がいゝ爲に相當の人出があつて芝生には蒲公英や、其に似た白い花が咲いてゐるし、櫻の樹に似た白い花の咲いてゐる木や、桃の花に似た紅い花の咲いてゐる樹などがあつた。エツフエル塔は三百メートルの高さがあるとのことで、近よつて見るとなか〳〵長大なものであるが、其頂に佛蘭西の國旗が樹つてゐた。鳩や雀にパン屑を擲げ與へてゐる老婦人があつた。其雀は日本の雀と喉のあたりの色が少し違つてゐ

るやうに思はれた。其が飛びながらパン屑を待受けてゐて巧にくはへとぶ樣は一寸面白かつた。私は此公園ではじめて雀を見たのであつた。公園を通る人が私の服裝殊に草履を不思議さうに見ることは例の通りであるが、中には立どまり振り返つて熱心に見詰める人もあつた。そんなに見なくつてもよさゝうなものだにと思ふが致し方が無い。

霞む日や破壞半ばのトロカデロ

椎名君が來た。今日は口授筆記を止め、佛國談を聞く

夕刻、日本の新聞、中央公論、手紙、屆く。

四月十一日。（土曜）

森脇襄治君から葉書が來た。去る七日に私を訪問したが留守であつたとのこと。已に巴里を發つて獨逸のフランクフルトに居るので、素十のハイデルベルヒを訪ひ、ライン下りをしてケルンに行くとのこと。

マテーズ氏から映畫試寫會の案内狀を送つてくれた。來る木曜日午前十時よりとのこと。

智惠子が來て章子と共に買物に行つた。

中央公論と手紙とが來た。

友次郎と相談、十八日より瑞西、獨逸に遊び、二十七日までに倫敦に行くことにした。

和田可居君から再び電報が來た。可居君に手紙で返事をした。

楠窓君から手紙が來て、英國の日程、アメリカまでの船のこと、且つ自分がアントワープに逗留のことを詳細報告して來た。其中にアントワープに來ないかとのことがあつたので、今日友次郎と相談したことを俄に變更、十八日アントワープに赴くことにし、其旨すぐ返事を認めた。

四月十二日。（日曜）

朝十時迄にエツフエル塔の下に集るやうにと急いだがすこし遲れた。此日主婦早く起き出で冷肉ハム等を買うて來てサンドウキツチを作つてくれた。それに番茶一瓶、果物一包を持參した。

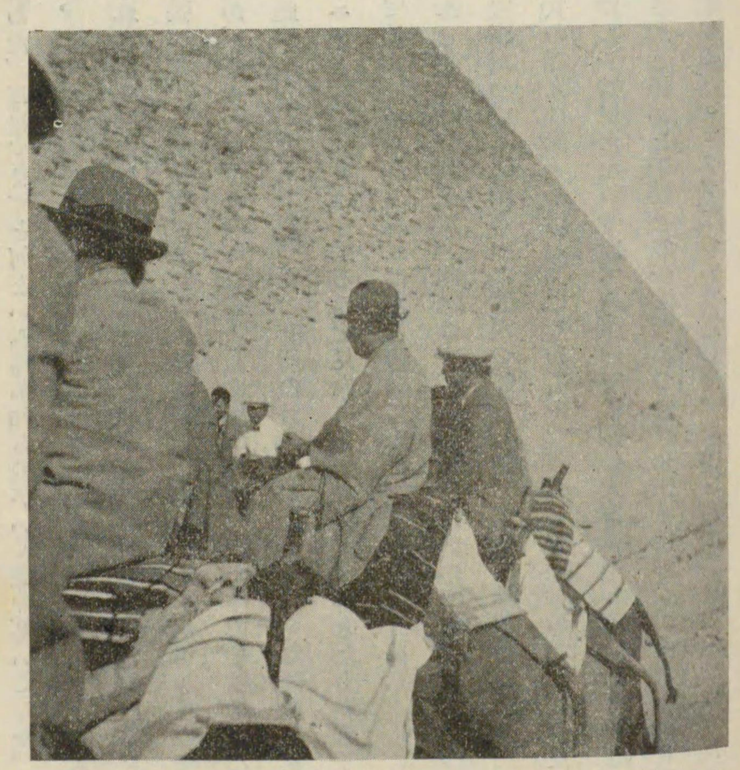
佐藤夫妻、柴虚風君が集つてゐたが、其他は誰も來なかつた。シヤン・ド・マースの停留場から電車に乘つてムードンに著。すぐ樣マテーズ氏を訪問した。マテーズ氏には前以て主婦から手紙を出して置いてもらつたのに其手紙は未だ著かなかつたさうで、寢卷姿で出て來て一行を款待して、折柄パークの鷄卵を染めたものを、佐藤の細君が連れてゐる女の子に呉れたりした。其息の

十六になつてゐる長大な青年とそれから姪を紹介した。友次郎を介して暫く話して其所を出て、再び停留場へ引返して、宅孝二君の後れて來たのと一緒になつてムードンの森へ自動車を走らせた。

折柄空が怪しくなつて來たと思ふと霰が降つて來た。自動車の窓をパチ〳〵とうつと思ふうちもう森の道が白くなつて來たので、自動車を降りて其處に在るレストランに驅け込んだ。はじめ庭に在る椅子に腰を下したが寒くて仕樣がないので部屋の中に這入つた。部屋は狹い部屋で已に一組の客があつた。そこで辨當を開いて食ふことにした。虚風君は近所の日本料理屋でこしらへさせたといふ卷鮓、佐藤君は握り飯に牛肉や午蒡の煮〻などそれ〴〵に出して食つた。いつの間にか日が當つてゐるので表に出て暫く森の中を散歩して句作した。

さつきマテーズ氏佗住居の裏を見たら葱の畑もあり、一株の苣も殘つてゐた。それから停留場へ來る途中で見たら春草の生えて居る道ばたがあり、芍藥の芽の赤らんでゐる庭もあつた。其他家と家との間の畑には杏の花が今を盛りに咲いてゐた。今こゝで見ると蒲公英もあり堇もあり、其他名を知らぬ小草が花をつけてゐた。道傍には春草が生ひ茂つてゐて馬大王に似た葉のものもあつた。森の木の芽は曾つて見たローヌ河の岸程美しくはないが、それでも一齊に吹き出してゐ

ピラミッドの下にて——駱駝に乘りたる虚子（中央）



て、其間を杏の花が點綴してゐた。耳をすますと何といふ鳥か知らぬがいゝ聲で鳴いてゐた。此森を散歩する人は稀にあるが、誰一人此杏の花のもとに立どまり森の小鳥の聲に耳を傾ける人は無かつた。若い女が二人かくれんぼをしてゐたが、それは先きの一組の客の連れであつた。レストランの前に三角形に天幕を張つて菓子の類をすこし店さきに並べ、何かをふかしてゐるのであらう、湯氣を盛に立てゝゐたが、誰一人此屋臺店に立寄る人は無かつた。森の中で枯枝をひろつてめき〳〵と折つてゐる男は此屋臺店の主人であつた。其所のお神さんは最前から私達の方を見たり、ドライヴの自動車のシュツと彈の如く過ぎ去るのを見たりしてゐたが、いきなり女の子を掌でぶつた。其音が大分離れて佇んでゐた私の耳にはたと響いて來た。

又空が暗くなつて來たと思ふと霰が降つて來た。其降つて來るのが面白いので我慢して立つてゐると堪へられなく寒くなつて來たので又部屋の中に這入つて行つた。今度は部屋の中には二組の客が殖えてゐて、一組は男女の二人は綿々と話し續けてゐるのであつて、物靜かではあつたがあたりを氣兼するといふやうな容子は見えなかつた。一組の客は髭の大きく濃い下品な男と丁度それに似合はしい下品なお神さんと青年と子供との一團であつた。ボーイはパンの大きな棒を四つ皿に載せて持つて來て、外に葡萄酒をコップについで出した。お神さんは其を飲んで赤くなつ

てニコ〳〵してをり、亭主の方は立ち上つて部屋の中を歩いてゐたが、其うち出て行つた。

尙續々と客が殖えて來て、其度に前からゐる客はテーブルを引寄せたり、椅子をがたつかせたりするのであつたが、新に置いた一つのテーブルには老人と其連れらしい老婦人が二人來て腰を下ろし、又眞中に置いた新しいテーブルには婦人を連れた紳士が這入つて來たと思ふと忽ち巨大な犬が這入つて來たのに驚いた。人間よりも大きな犬で、一度這入つて來たのが又表に出ようとしてずる〳〵と紳士を引張つて行つたが、漸く連れて來て卓の傍に坐らせた。皆が其巨大な犬を見て稱讃の聲を放つと、紳士は口許に微笑を含んでヅボンのポツケットからタオルを出して其犬のよだれをふいてやり、犬の口を自分の口へ持つて來て接吻をした。其婦人も時に手を出して犬の頭を撫でるのであつたが、此婦人はむく〳〵とした毛皮の襟卷や厚ぼつたい外套につゝまれてゐる後ろ姿を見せてゐる許りであつた。

はじめから居る一組は最前からトラムプをはじめてゐた。蓄音器は絶えず鳴り續けてゐたが、トラムプを手に持つたまま其蓄音器に合はせてラララララと唄つてゐる女もあつた。大きな欠びをして其欠びのつゞきを唄にする男もあつた。最前のかくれんぼをしてゐた若い二人の女は又ここには居なかつた。

三時に迎への自動車が來たのでそれに乘つて歸ることにした。友次郎は十年前にこゝに住んでゐたので、歸りの自動車の中で「あそこが僕の住んでゐた家です」と横町の方を指した。

私達の宿に歸つて互選披講をした。

若草を踏む吟行の靴の鳴り　虛風
春寒き茶屋の主の欠びかな　綠水
人々の茶屋に出這入り春霰　悅子
枯幹をうしろに木の芽萌ゆる幹　孝二
木の芽茶屋降り包みけり春霰　友次郎
木の芽茶屋春の霰の賑やかに　同
囀や四方の木の芽のそこ〻に　同
木の芽萌ゆムードンの森のかくれんぼ　章子
大空に燃ゆるが如き木の芽かな　同
菫摘むムードンに來し記念にと　同
欠びすぐ唄になりけり花の茶屋　虛子

いつまでもトラムブするや花の茶屋　同
もの靜に花に情話やはゞからず　同
鉢植の芭蕉青きを含みけり　同
春霰草に躍りて積りけり　同
春霰落花にまがひ積りけり　同
パーク祭春の霰の降ることも　同

虛風君が先づ歸つて、宅君には途中より別れ、佐藤君夫婦と牡丹屋に行き、すき燒を食つて歸つた。

十時半寢。

日本人會の俳句會